

1988

9

聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道

1988年9月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
 十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシントン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン
 顧問：ヒュー・W・ビノック、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、キース・W・ワイルコックス
 編集長：ヒュー・W・ビノック
 教会機関誌ディレクター：ロナルド・L・ナイトン
 編集主幹：ラリー・A・ヒラー
 編集副主幹：デビッド・ミッチェル、アン・レムリン
 制作：レジナルド・J・クリステンセン
 マーケティング・マネージャー：トーマス・L・ピーターソン

聖徒の道 1988年9月号第32巻第9号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30
 電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
 半年予約1,100円(送料共)
 普通号150円,大会号350円

International Magazines PBMA 8809JA
 Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1988 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

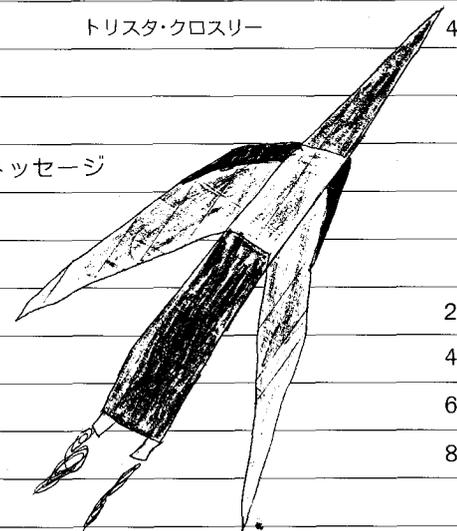
●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-440-2351 (代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎0427-96-2820

Published monthly by the Corporation of the President of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year. \$1.75 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, United States of America. Subscription information telephone number 801-531-2947.

POSTMASTER: Send form 3579 to "Seito no Michi" at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, United States of America.

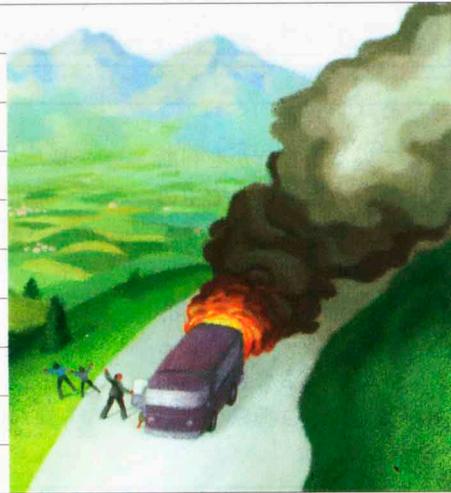
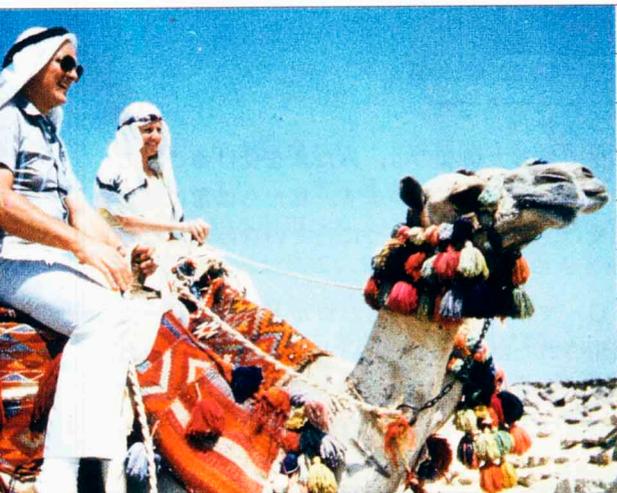
●—もくじ

大管長会メッセージ		
主のみたまを求めなさい	エズラ・タフト・ベンソン	2
家庭訪問メッセージ		
「愛は、悪いことを考えない」		7
あなたの十字架を負いなさい	マービン・J・アシントン	8
竜巻	アイリーン・F・M・ベル	10
奇跡を起こしに行く途中で	メアリー・エレン・エドマンズ	13
チャールズ・デイディエ長老	エドウィン・O・ハロルドセン	17
モルモン経が与えてくれるもの		
私には著者がわかりました	ロベルト・マネス	23
スイスのサマリヤ人	カレン・L・ブラウン	25
揺るぎない信仰	ジェームズ・E・ファウスト	26
末日聖徒の体験談		
メキシコでの「マラソン」	ブリジッタ・A・ペレス	32
真実の光	マルチャーナ・シューバル	34
その言葉は成就する	エリカ・ハイマン	35
その人たちはそれが最後の儀式だと思っていました	リチャード・L・エメリー	35
質疑応答	ラリー・E・ダール	37
私の父と盲人	ドレーン・ウーリー	39
——若人のために——	デニス・K・カレン	48
モルモンメッセージ		41
模範の証	ジョセフ・ミルナー	42
寒中のレッスン	グレゴリー・グレン	44
あのお話を覚えています	トリスタ・クロスリー	47
各地のたより		
10月の大管長会メッセージ・扶助協会メッセージ		
子供のページ (別冊付録)		
モルモン、ゆうかんな予言者		2
せかいのおともだち		4
めうしとフォーク		6
おもちゃばこ：もりのいきもの		8



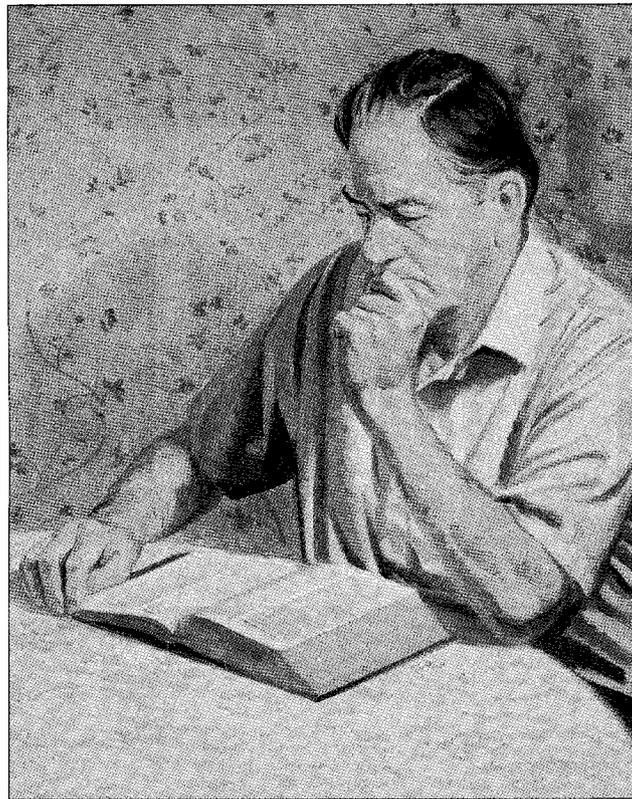
表紙：「ニーファイの示現」 クラーク・ケリー・プライス1980年度作

カール・スポエル提供



主のみたまを 求めなさい

大管長 エズラ・タフト・ベンソン



自分がまっすぐな細い道を歩いているかどうかを判断するひとつの確かな方法は、普段の生活の中で主のみたまを感じているかどうか、振り返ってみることです。

聖霊を受ける人は、それにふさわしい実を結びます。

使徒パウロは、「しかし、御霊^{みたま}の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない」と言っています。(ガラテヤ5：22-23)

私たちの人生で最も大切なのは、みたまを受けることです。私はいつもみたまを感じています。私たちは常に聖霊のささやきを受け、感じられるようにしていなければなりません。

デビッド・O・マッケイ大管長とハロルド・B・リー大管長がよく引用された話を紹介したいと思います。それは、ジョン・ウェルズ監督が体験したことで、すべての人に有益な教訓となります。ウェルズ監督は教会の多くの報告書

に関する責任を持っていて、こまごまとしたことに多くの時間をさいて働いていました。

「田さん、もう悲しまないでください」

あるとき、ウェルズ監督の息子がソルトレーク溪谷の列車事故で命を落としました。貨車にひかれたのです。息子を亡くしたウェルズ姉妹の悲しみは大変なものでした。葬儀の間も、埋葬が終わったあとも、彼女の嘆きは続きました。ウェルズ監督は、その深い嘆きを見て、健康を害してしまうのではと心配するほどでした。

葬儀が済んで間もないある日、ウェルズ姉妹が悲しみの内に床に伏していたときに、亡くなった息子が現われ、こう言いました。「お母さんもう悲しまないで、泣くのをやめてください。ぼくのことは何も心配ありません。」

彼はそれから事故が起きたときのことを話しました。彼は経験豊かな鉄道員で、なぜそのような事故が起きたのかははっきりしない点がいくつかあったのです。

しかし、彼はそれがまったくの偶発的な事故だったことを母親に告げました。

さて、皆さんの心に留めていただきたいのは、次のことです。母親が聞いた話によると、息子は自分が肉体を離れたあとに、父親に話しかけようとしたが、どうしてもそれができなかったということでした。ウェルズ監督はこまごまとした仕事に追いまくられ、みたまのささやきを感じることができなかったのです。息子が母親に現われたのは、そのためでした。

息子は続けて母親にこう言いました。「ぼくが今、幸せにしていることをお父さんに伝えてください。そしてお母さんもこれ以上悲しまないでください。」(デビッド・O・マッケイ「インブループメント・エラ」1953年、pp.525-26参照)

マッケイ大管長とリー大管長は、みたまのささやきを感じられるように、常に備えておく必要について教えるために、この話を引用されました。仕事に追われていたり、心配事に心を奪われているときには、ほとんどみたまのささやきを受けることはできません。

心静かに瞑想する時間をとってください。ひとりの少年を森に導き、天父にまみえさせたのは、瞑想でした。彼がヤコブ書1章5節の聖句について瞑想したことがきっかけ

となり、天が開かれ、この神権時代が始まったのです。

三種の光栄に関するすばらしい啓示が与えられたのも、ジョセフ・スミスが新約聖書のヨハネによる福音書の聖句について瞑想した結果でした。

ジョセフ・F・スミス大管長の前に天が開かれ、霊界の様子が示されたのも、やはり彼がペテロの手紙の言葉を深く考えたことが始まりでした。死者の贖い^{あがな}に関する示現として知られるその啓示は、今は教義と聖約の一部となっています。

子供を持っておられる方々は、主から託された責任の重要性についてよく考えてください。主はこう勧告されました。「汝らのこころに永遠の厳粛なることを銘記すべし。」(教義と聖約43:34) これは、世の煩い事に心を奪われていてはできないことです。

奥義を知る

聖典を読み、研究してください。聖典は、両親の率先垂範のもとに家庭で学ぶべきものです。また聖典を理解するには聖霊の力が欠かせません。主は忠実に従う人々に「汝……奥義にして平和なることを知るを得べし」(教義と聖約42:61)と約束しておられます。

キンボール大管長の次の話には、日々の生活の中で霊性を伸ばすにはどうしたらよいかが述べられています。

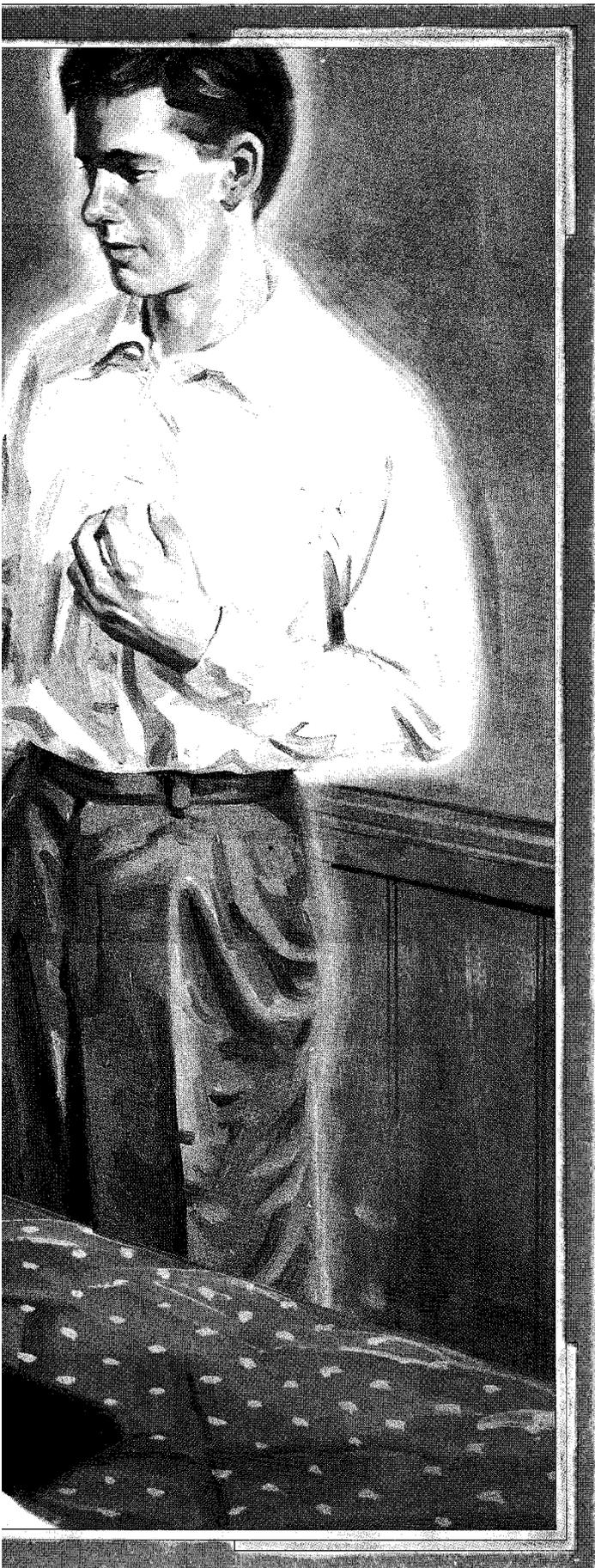
「私は自分が神と密接な関係になくなったと感じるとき、また自分の祈りが神の耳に達せず、神のみ声が聞こえないように思われるとき、神からはるか遠く離れていることを知る。そのようなとき、一生懸命に聖典を読むと、その距離は縮まり、霊性が回復してくる。また、心と思いと体力を尽くして愛さなければならぬ人々を以前にも増して深く愛するようになった自分に気づく。そして、愛が深まると、彼らの勧告にも容易に従えるようになるのである。」

(「教会教育者の務め——孫に教えてほしいこと」セミナー・インスティテュート職員への講演、1966年7月11日、プリガム・ヤング大学)

これはすばらしい勧告です。私は自分の経験から、これが真実であることを知っています。

聖典に親しめば親しむほど、「主の心と旨」(教義と聖約133:61)をよく知り、夫婦、親子の絆^{きずな}が強められます。そして、聖典を読むことによって、永遠の真理が自分の心に





刻まれるのを知ることができるようになります。

自分が理解していない事柄について深く考えてください。主はオリヴァ・カウドリに次のような戒めを与られました。「されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。」(教義と聖約9：8)

「汝にその正しきを感じしむ」という言葉に注意してください。

多くの場合、主のみ言葉は、「感じ」を通して与えられます。主は謙遜で、受ける備えのできた人に、感情を通してささやいてくださるのです。みたまのささやきを受けると、心に大きな喜びを感じたり、涙を流すことがあるのはこのためです。私自身もみたまに感動して、気持ちを和らげられたり、心が研ぎすまされるのを感じたことが何度もあります。

みたまの影響力を輝かす

聖霊は私たちの感情を和らげてくれます。また私たちは聖霊の力によって、お互いの愛と思いやりを深め、穏やかな気持ちで人に接することができるようになります。私たちは今よりもっと強く愛し合えるようになるのです。みたまの影響力は顔の表情の輝きとなって表われ、人々を引きつけます。また私たちはみたまの力を通して、人格を築き、さらに神に近づいていくことができるのです。そして結果的に聖霊のささやきにもっと敏感になり、霊的な事柄が理解できるようになります。

救い主の次の言葉を心に留めてください。「汝らまた預め何を言わんと憂うることなかれ。ただ終始生命の言を心に蓄うべし。さらば必要の時に当り、すべての人に適いたる言うべき言ことばを与えらるべし。」(教義と聖約84：85)

私の義母バーバラ・スミス・アムッセンは夫に先立たれてから40年生き長らえ、20年をローガン神殿での奉仕に捧げた人です。彼女は本当に誠実な女性でした。私は彼女がとても好きで彼女と一緒にいることがよくありました。夫に先立たれた後の彼女の家には、神権者がいなかったためです。

彼女はいつ自分がこの世を去るかを知らされていました。というのは、デンマークで改宗し、ユタで最初の宝石時計

商となった夫のカール・クリスチャン・アムッセンが夢や示現の中に現われ、彼女にそのことを告げていたからです。彼女がこう言いました。「夢だったのか、啓示だったのかははっきりしないけど、とても生々しい感じだったわ。彼が部屋にいたのよ。私がいつこの世の生涯を終えるかを知らせるために来たの。次の木曜日よ。私がこの世を去るのは。」

それを聞いた一番年上の娘メーベルは、「お母さん、何か心配事があったの。具合がよくなかったんでしょ」と言いました。

すると母親が答えました。「悪いところは何もないわよ。具合もいいわ。何も心配はないし。ただ、今度の木曜日 cameたら、あなた方とお別れしなくちゃいけないわ。

メーベル、その時が来たたら、あなたの家の2階の部屋に行かせてね。子供たちに小さいころモルモン経や教会の昔の話の聞かせたあの部屋よ。あそこで最後を迎えたいの。」日曜日が来て、彼女はワード部の断食証会に出席しました。彼女が証をすると、監督がまるで長い旅に出かける前の話のようだと言いました。

監督は後にこう言いました。「彼女は全員に別れを告げ、私たちへの愛と、神殿で奉仕できた喜びの気持ちを話していたのです。」(神殿とワード部の礼拝堂は数メートルしか離れていませんでした)彼女の証は熱烈なものでした。さらに日がたちました。彼女は銀行へ行ってお金を引き出し、すべての支払いを済ませると、今度は自分の棺の手配^{ひつぎ}までしました。それから、自分の家の水道と電気を止め、メーベルの家へ行きました。彼女がこの世を去る前の日に、息子が訪ねてきて、ふたりはベッドのところで手を取りあっていた話をしていました。

そして木曜日、メーベルが部屋へ行くと、彼女はこう言ったそうです。「メーベル、ちょっと眠たいわ。もし寝てしまったら、夕方までそっとしておいてね。」

それが彼女の最後の言葉でした。彼女は安らかに次の世へ行ったのです。

私たちが何にも増して強く求められているのは、霊性、すなわち主のみたまとの一致です。生涯を通して、常に聖霊の導きを求めなければなりません。みたまを授けられた人は、奉仕を愛し、主を愛するようになります。そして、共に奉仕に励む人、奉仕する相手の人々を愛するようになります。

殉教後数年してから、ジョセフ・スミスがブリガム・ヤ

ング大管長に現われ、次のように言いました。

「へりくだり、忠実であるように人々に教えなさい。そして確かに主のみたまを受けられるように教えなさい。そうすれば義に導かれるからです。静かな小さい声が告げることに背かないようによく注意しなさい。それは、あなたに何をし、どこへ行くべきかを示し、王国の実を結ばせるものだからです。神の教えに従うよう兄弟たちに教えなさい。そうすれば聖霊が来るときに、それを受ける備えができるからです。」(エルデン・ジェイ・ワトソン編「ブリガム・ヤングの歩み」1847年2月23日)

主はこれまでこの業を栄えさせてこられました。今後もそうしてくださることでしょう。主は僕たちの近くに、しかも、ささやきかけるほどの近いところにおられるのです。

この末日の業は霊的なものです。それを理解し、識別するには霊性が必要です。ですから、すべてのことにおいてみたまを求め、常にその導きを得られるようにしてください。私たちはそうするように求められているのです。

主のみたまが皆さんとご家族の上に注がれるように祈っています。□

ホームティーチャーへの提案

1. 私たちの人生で最も大切なのは、主のみたまを受けることである。
2. 聖典を読み、研究する人は、日々の生活の中でみたまを受けられることができる。
3. 私たちは瞑想によって、みたまのささやきに敏感になることができる。
4. 私たちは主のみ言葉を「感じ」として受ける。
5. 末日の業は霊的なものであり、それを理解し、愛し、識別するには霊性が必要である。

話し合いを進めるために

1. 毎日の生活の中で主のみたまの導きを受けらるることに ついて、あなたの感じていることを述べる。
2. このメッセージの中に、家族で読んだり話し合ったりするとよい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておいた方がよいだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。

「愛は、悪いことを考えない」

(モロナイ7:45; Iコリント13:5参照)

目的：絶えず徳をもって思いを飾る

聖典には次のように書かれています。「人となりはその心に思うそのままであるからだ。」(欽定訳箴言23:7)「すべての人に対して、また信仰ある家族に対して汝の腹中を慈愛にあふれしむべし。絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。」(教義と聖約 121:45)使徒パウロと予言者モルモンも、慈愛すなわち、キリストの純粹な愛は、「悪いことを考えない」と教えています。(モロナイ7:45; Iコリント13:4-5参照)確かに、私たちの人格は、心に思うままに作られています。正しいことを考えれば、間違いなく生活も正しいものになっていきます。

私たちはどうしたら善と悪を識別することができるでしょうか。聖典の中から読んでみましょう。「神から出るものはいつも人を善い行いに誘い導いて善いことをさせようとするから、すべて善い行いに人を誘い導いて善いことをさせ、神を愛させ神に事えさせようとするものは、神のみこころがこもっている。」(モロナイ7:13)

自分の思いを制するのは、自分以外にありません。畑の手入れをするときと同じように、私たちはよい思いを育てていく一方で、雑草のような汚れた思い、否定的な考え、罪深い考えを取り除いていかなければなりません。

正しい思いを育てるよい方法がひとつあります。人生の目的が何かをいつも心に留めるのです。自分を裕福な生活をしている人と比較しては憂うつな気持ちになっている女性がいました。

彼女はこれではいけないと思い、自分の思いを変えようと決心しました。そして、自分が持っていない物についてあれこれ考えるのをやめ、自分がどのような人になりたいかをいつも考えるように努力しました。彼女は熱心に聖典を読み、救い主の生涯や救い主の模範に倣うことについて真剣に考えました。

それをしているうちに、彼女の心は、自分の周囲の助け

を必要としている人々に向けられていきました。そして、自分自身の証と家族の大切さが前にも増してよくわかるようになり、この世の富よりも人々の中にあるキリストのような特質がもっと貴重思えるようになってきたのです。人生を見る目を変えたことにより、彼女は前よりもはるかに幸せな気持ちを感じることができるようになりました。

心を清くするには、悪い思い、否定的な思い、汚れた考えを避け、捨てるとともに、徳高いことを考えるように努力しなければなりません。どのようなことを考えたらよいかについて、聖典にはこう書かれています。

「最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい。」(ピリピ4:8)

「それらのものを心にとめる」には、良い環境を作るように努力し、聖典や良書に親しみ、賛美歌を歌い、祈り、断食し、安息日を聖くしなければなりません。また健全な娯楽、慎みのある服装を選び、才能を伸ばすとともに、教会や地域社会で奉仕し、戒めに従うよう努力することも必要です。

徳高い思いを抱くにつれ、生活自体が徳高いものになっていきます。そして、思いと行ないにおいて正しい生活をしたいと望むようになり、さらにキリストに近づけるようになるのです。□

訪問教師への提案

1. マタイ6:19-21を読み、天に蓄える「宝」について話し合う。
2. 教義と聖約 121:45-46を読み、徳高い思いがもたらす祝福について話し合う。正しい思いや望みは、家族の霊性をどのように高めてくれるのでしょうか。
(「家庭の夕べアイデア集」pp.15,257-59参照)



あなたの十字架を 負いなさい

十二使徒定員会会員 マービン・J・アシュトン

イ エスは言われました。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。

自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。」(マタイ16:24-25)

私たちは、それぞれどのような十字架を負っているのでしょうか。その形や重さ、大きさはどのようなものでしょうか。いろいろあります。孤独という名の十字架、手足や聴力や視力、そして運動機能の喪失という肉体的障害の十字架。これらは、だれの目にも明らかな十字架です。私たちは、こうした十字架を背負っている人々を目にしますが、威厳を持って背負うその強さは、まさに賞賛に値するといえるでしょう。病弱もまた十字架です。自己顕示欲や誘惑、それに美や名声や富もまたそうです。負債もそうですし、友人からの批判や拒絶も同様です。

しかし、人生の中には、実際に存在しているにもかかわらず、それほど容易に認められることのない十字架がたくさんあります。両親や家族、教師や監督、ステークス部長会、ボーイフレンドやガールフレンド、同僚やクラスメイトなど、こうした人たちによって打ち砕かれてしまった信頼もそのひとつです。

もうひとつの十字架は、自尊心の欠落、つまり自分自身を受け入れることに消極的な気持ちを持つことです。これは、いつも目で見えてわかるといったものではないのですが、心に重くのしかかることのある、やっかいなものです。あなたは心の中で、自分の行ないに対して良い評価を与えることがよくあるでしょうか。それとも、何をしても自分を悪く考えてしまうのでしょうか。そのように考えるということは、すなわち重い十字架を背負うことであり、永遠の成長を遅らせてしまいます。

「あの人のような優れた才能や力を持ち合わせていたら」と望むことは、それだけで障害となります。神の助けがあればたくさんのことを達成できることに気づかないのもまた、背負わなければならない十字架となります。この点に

おいて、私たちは、アンモンのようになることを学ぶことができます。アンモンは次のように言いました。

「私は自分の能力も智恵も誇るのではない。ごらん、私は喜びが満ち充ちて心に溢れるばかりであるから、私の神がましますことを喜ぼう。

私は自分が取るに足らない者であることを知っている。私の能力は弱い。それであるから、私は自分のことを誇らないでただ私の神のことを誇る。それは神のたもう能力によって何事もすることができからである。」(アルマ26:11-12)

アンモンの言ったことを信じて実践できればどれほどすばらしいでしょうか。責任の重い地位に召された多くの人々は、謙遜にこう言います。「天のお父様、私は弱い者です。でも、あなたの助けがあれば、私はできます。」もし私たちが神の助けを自分から進んで求めるならば、神は私たちの十字架を負いやすくしてくださるでしょう。教義と聖約56章2節において、主はこのように言われました。「およそ自己の十字架を負いてわれに従わんとせず、またわが誠命を守る心なき者は救われることなからん。」

聖典には、「見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし」(教義と聖約58:42)とあります。これは真実です。私たちは、悔い改めることによって自分自身を赦すことができるようになるのです。不幸なことですが、罪を告白して生活を改めることをせず、むしろ必要以上に長い間十字架を負い続ける方を選ぶ人がいます。

勧告に対する不従順も十字架です。従うべき指示や、管理、通達などに対して憤りや反発の態度を示したり、わざと対応を遅らせたり、議論をしかけたりする人がいます。

「自分を何様と考へて、私に指示をするのか」とか「なぜこんなに規則があるのか」、「自由意志はいつ使えるのか」、「どうして放っておいてくれないのか」などと考へたりするのです。

私たちは、自分にとって不都合なことや価値のあまり理解できないことには従おうとしない場合があります。私は、

皆さんが与えられている勧告には祈りを込めて従うことができるようにと、心から願っています。

時々、祈りについて学ぶことができるように、十字架が与えられることがあります。その十字架も、祈ってその答えを待つということを学べば、もっと負いやすいものとなるでしょう。しかし、耳を貸そうとしなかったり、学ぼうという気持ちがなかったりすると、この目に見えない十字架は、重く重くのしかかってきます。答えがなかなか受けられなかったり、答えがあっても受け入れるのが大変なことがあるでしょう。そのようなときにも、絶えず祈ってください。

世の誉れも重い十字架となります。金銭や地位について言っているではありません。人から認められることについてです。召しや責任を尊ぶのは当然です。しかし、たとえ公に認められ、名誉や尊敬を受けている人であっても、神の目から見て必ずしもよしとされるとは限りません。主に従い、病んでいる者や悩んでいる者、落胆している者、家のない者、十字架の重荷に苦しむ者に手を差し伸べることが真の偉かさであると理解している人こそ、神の目から見てよしとされるのです。

十字架を負い、さらにその過程で、神様の恵みを感じたり見分けたりする力を身につけることは、私たちの特権であり責任でもあります。賛美歌には次のようにあります。

苦しみの荷を背負うか

十字架なれ汝に重きか

恵みうたが数え見て日々を

疑うたがはらしてうたわん

(讚美歌46番)

時々、自分の負う十字架が理不尽なもの、不公平なものと感じられることがあるかもしれませんが、その十字架は、私たちにとってむしろ有益なものであると証します。十字架を負い、救い主に従うならば、人生に力と平安と目的ともたらされることでしょう。□

(ユタ州プロボ、ブリガム・ヤング大学での講話からの抜粋)

カ ナダのアルバータ州エドモントンにあるレイドロ廃棄物処理システムという会社の一日の仕事もようやく終わりに近づいていました。エドモントン・アルバータ・ミルウッズステーク部の高等評議員であるドン・ヒューズも自分の席で仕事をしながら、今日はずっとよりちょっと早目に帰れるな、などと考えていました。

1987年7月31日の午後3時30分頃のことです。エドモントンに住んでいた人なら忘れることのできないような、最高に気温の上昇した週の出来事でした。この週は異常なほど湿度も高く、その前の晩も見慣れない雲が大量に市の上空を通過していきました。まるで映画の特殊撮影でも見ているような光景でした。

この日、その時刻のほんの少し前、ヒューズ兄弟の夫人が会社に立ち寄って、一緒に帰宅できないかどうか聞きました。

「私も家へ帰りたいという気持ちはありました。でも同時に『ここにいなさい。まだすることがある』という奇妙な気持ちも感じたのです。私は自分のやり残した仕事は何であるかはわかりませんでした。そのささやきに従って残ることにしました。そこで妻にはまもなく帰るから、と言ったわけです。」

その直後、市のその地域の電気が消えました。そのとき会社に残っていた7人のう

竜巻

アイリーン・F・M・ベル

たつ
竜

ちのひとりが窓の外を見て、南の方から竜巻特有のじょうご型の雲がこっちへやって来そうだと言ったのです。

「私はその雲を見るとすぐに、みたまが私に『あの竜巻は真直ぐにこの建物に向かってくる。この人たちを避難させなさい』とささやいているように感じました。」

ヒューズ兄弟は同僚たちに竜巻の状況に注意するよう言うと、建物の後部へ行ってみました。そこでも12、3人の社員が巨大化する竜巻を見ています。竜巻は1秒刻みでどんどん大きくなり、間違いなくこちらに向かってくるのでした。

ヒューズ兄弟は、以前アメリカに住んだことのある友人が、竜巻に襲われそうになったら、頑丈で安全な場所に入っている、と言っていたことを思い出しました。

「それで、部下に部品倉庫に避難するよう言いました。その部屋はコンクリートのブロックで四方を囲まれていて、しかも建物の真中であつたからです。ところが実際には皆、竜巻を見るのに夢中でだれひとり私の指示など聞こうとしないのです。」

ヒューズ兄弟は通りに面した部屋へ駆け込みました。竜巻は今にも地面と接触しそうです。竜巻はすでに近くの材木置場を襲い、次々に急速な勢いで材木を空中に巻き上げています。今では空全体が竜巻でおおわれていました。まるで巨大な貨物列車の

ような音を立てて、材木の山をその暗黒の雲の中に吸い込んでいきます。自動車も小屋も機械までも巻き込んでいきます。

「私はその部屋にいる社員全員に向かって、すぐに食堂へ避難して、竜巻が過ぎるまでそこを動かないように言いました。私は全員が避難するのを確認してから、建物の後部にいるほかの従業員の様子を見に行きました。私たちのいる建物の南にある建物はすでに竜巻のために倒壊しかかっています。私の部下のひとりには写真を撮っていましたが、残りの社員は皆怖そうに見えています。どこへ避難したらよいか、まったくわからずにいたのです。」

ここでも、ヒューズ兄弟は部品倉庫へ避難するよう指示しました。ところがそれでもぐずぐずしているのです。「そこで私はそれまで出したことがないような大きな声でしかも強い調子で『全員、直ちに避難』と指示を出しました。みたまの力が働いてこのような命令が出せたのだと思います。それで皆、我に返ったようでした。」こうして全員急いで部品倉庫へ避難しました。

ヒューズ兄弟は同僚たちの無事を確認したあと、通りに面した別の部屋へ向かって走って行きました。竜巻はすでに高速道路の反対側にある運輸会社の建物を破壊し、今度は走っていくヒューズ兄弟をねらっています。

会社の建物の窓ガラスも吹き飛ばされ始めました。「まるで散弾銃でも撃ちまくっているような音でした。バーン、バーンと次々に吹き飛ばされ、割れていきました。」

彼は小さな貯蔵倉庫の中に飛び込んで避難すると、力いっぱいドアを閉め、壁にしっかりと体を押しつけて、同時に建物の中にいた人が皆無事であるよう願いました。

「外の竜巻はどんどん大きくなっていきます。音でわかるというより、体でわかりました。まるで電車かジェット機のエンジンのような音です。地響きのような重い音と、かん高い風の音が一緒になった音でした。

私は急いでいろいろなことをお祈りしました。私と一緒に働いていた人のためにも、自分の家族のためにも、また同僚たちの家族のためにも、無事に守られるよう祈りました。私は、自分が主のみこころに従って生きのびることができるようお願い、そして祈りました。また、みこころならばいつでもみもとに行く用意はできています、ともつけ加えました。」

ヒューズ兄弟が祈っている間に、鉄筋コンクリートの建物も吹き飛ばされていきました。外にあったはずのトラクターや鉄鋼貯蔵庫、巨大なエア・コンプレッサーや産業廃棄物用のコンテナといったものが、まるでおもちゃのように空中に巻き上げられていきます。貯蔵倉庫の壁も倒れ、ヒューズ兄弟も床に投げ出されてしまいましたが、そのお陰でほかの瓦礫からは守られました。見上げると天井は吹き飛ばされてすでになく、黒い雲がうなり声をあげ

て頭上を通り過ぎていきます。もう一度竜巻が地面に触れたら、と思うと生きた心地もしなかったのですが、竜巻は建物からだんだんと遠ざかっていきました。

ヒューズ兄弟は避難場所からはい出ると、壊れかかったドアに体当たりをして、貯蔵倉庫から抜け出しました。「私は建物の一部には損害は出るだろうと覚悟はしていたのですが、実際には無傷の建物はひとつもありませんでした。まるで巨大なハンマーでたたきつぶされたような状態でした。」

通りに面した部屋には何人かの女性が働いていましたが、そのうちのひとりのご主人が、たまたま竜巻に襲われる直前に会社に来ていて、近くの退避所に避難していました。ヒューズ兄弟はこの男性とふたりで、食堂があったはずの場所へ走って見にいきました。そこでは二方の壁が崩れ落ち、互いに重なりあって、がれきの山を作っています。その山の上に昇ってふたりはほっと胸をなでおろしました。社員たちが、たまたま残った2枚の壁に囲まれた隅のところに無事避難していたことがわかったからです。

それからふたりは、今度は部品倉庫があったはずの場所へ走って行きました。そこではすでに残骸の下から4、5人の人がはい出しています。この人たちは素手でがれきの山からねじ曲がった鋼材やコンクリートのブロックを引き出し、その下にいるはずの同僚たちの救出にあたっていたのでした。こうしてこの人たちは、建物の反対側のがれきの山の中から、仲間たちを助け出しました。この大災害の中で、長期入院を要するようなかげをした人は、背中に傷を負ったたったひとりだけでした。

緊急救助隊が到着したときには、レイドロウ社の社員たちは自分たちの会社で製造している産業廃棄物用の大きなコンテナの中に避難して、竜巻の直後に襲った野球ボール大の雹から自分たちの身を守っているところでした。

この竜巻はエドモントンの歴史始まって以来の大災害をもたらしました。損害は2億5千万ドル(約325億円)以上にも及びました。市全体では27人の生命が奪われたのです。

丘の上に立ち、レイドロウ社のつぶれた建物をながめていると、ドン・ヒューズは、もしあの時、ああしていなかったとしたら、という思いに駆られます。

「社員の中にひとりも死者が出なかったことは、まさに奇跡です。結局、私たちが避難した場所だけしか最後まで退避所としての役割を果たした所はなかったのです。この大災害のことを考えると、まさに主がそのみ手を差し伸べて、私たちのために避難する場所を作ってくださいただとしか私には思えないのです。」□

* ニュースキャスターであるアイリーン・F・M・ベルは、カナダのエドモントン・アルバータ・ミルウッズステーク部のエドモントン第7ワード部で活動委員会の委員長として働いている。

ある日のこと、一人娘が死にそうなので助けに来てもらいたいというヤイロの願いにこたえて、救い主が出掛けていかれたことがあります。その途中で、長血をわずらっている女が救い主に近づいてきて、その衣のすそにさわりました。救い主は立ち止まると、時間をさいてその女に話しかけ、慰めを与えられました。その女はすぐにいやされました。こうしてイエスがヤイロの家に向かって進んで行くと、ひとりの人が、その娘がすでに亡くなったことを知らせにきました。しかし、イエスはそのまま進んで行き、その娘を死からよみがえらせたのです。(ルカ8:41-56参照)

救い主は途中で立ち止まって、関心や助けを必要としている人のためにその時間を費やされました。救い主はこのようなことを幾度もなさっています。第三ニーファイの17章には、キリストがニーファイ人を訪れられたときのことが書かれています。ニーファイ人に教えを説かれたあとで救い主はこのように言われました。「今われは御父のもとに^{のぼ}り、また失われて行方の知れざるイスラエルの支族のところへ行きてわが身をかれらにも現わさざるべからず。」

(4節) それから救い主がその民をごらんになると、その民は涙を流して「イエスに今しばらく自分らと共に居りたまえと言わんばかりに」(5節)イエスをじっと見つめていたのでした。

不思議な業が行なわれる

イエスはしばらくとどまられました。そして、ニーファイ人の中にいる病める者たちを連れて来させ、その人たちを皆癒されたのです。またイエスの捧げられた祈りのみ言

葉は、書き表わすことができないほど驚嘆すべきものでした。救い主は民と共に涙を流し、幼な児たちを一人一人祝福して、子供たちのためにも祈られたのです。また、民の

奇跡を 起こしに行く 途中で イエスのように 愛し、仕える

メアリー・エレン・エドマンズ



間で聖餐の儀式もお始めになりました。救い主がその民の中にとどまられたがゆえに、不思議なみ業が行なわれたのです。

主はよきサマリア人の^{たと}譬えをお話しになりました。このサマリア人は、おそらく何か大事な会合か用事があったのででしょう。それでも、困っている人を見たときには立ち止まりました。(ルカ10:30-37参照)

さて皆さんは、困っている友の話を書くために、隣人と話をするために、みたまのささやきに耳を傾けるために、どれくらい頻繁に立ち止まっているでしょうか。

末日聖徒として、またクリスチャンとして、私たちは今以上に喜んで立ち止まり、助けの手を差しのべる必要があります。私たちは、機会をとらえては善を行ない、人格を磨こうとする人をもっと必要としています。

ある日、友人と私は、若い母親が立往生したトラックのそばに立って途方にくれている光景に出くわしました。その母親は幾人もの子供を連れていました。私たちは立ち止まり、助けることにしました。その母親の説明によると、トラックのガソリンがなくなったというのです。

そこで私たちがガソリンを買いに行く間、子供たちと一緒にいるように彼女に言いました。彼女は私たちの申し出に感謝はしているようなのですが、どうも人に助けをもらうことに^{ちゆうちよ}躊躇しているようでした。私たちがガソリンを容器に入れて戻って来ると、その女性はお礼は言うものの、まだこだわっている様子でした。

そのとき私に良い考えが浮かびました。私はその女性にこう言ったのです。「もし私が困っているときがあったら、今度はあなたが同じように助けてくださるといえるのではどうでしょうか。」彼女はしばらく考えていましたが、それから^{はほえ}微笑むと、「わかりました。今度は私が助ける番ですね」と言ったのです。

今となっては私はあの日、友達とどこへ行こうとしていたのか、まったく思い出せません。しかし、人助けをしたあの心温まる経験だけははっきりと覚えています。きっと、私たちの大部分は立ち止まって、手助けしたいと考えているに違いありません。しかし、私たちは何をしたらよいのかわからず、あるいはまた忙し過ぎたり、時には恐れを抱いたりしているのではないのでしょうか。また、人助けをする適切な備えができていないこともよくあります。しかも、ある人が危機に直面し、あなたの助けを必要とするような事態になっても、よりどころとなるような手引きは何もないのです。

しかし、主の「手引き」に書かれている内容を勉強し、みたまのささやきを聞く者となれば、霊的な準備をすることはできます。困っている人の要請にキリストのようにこたえるにはどのようにしたらよいのか、ということに関する資料としては、聖典やみたま以上に優れた指導書は存在しないのです。

愛を深めるための段階

愛を深め、思いやりを





深め、みたまや他人の声に対する感受性を高めていくうえで、私たちにできることは数多くあります。次にあげる提案の中には役に立つものもあるかもしれません。

—会いに来れない人たちを訪ねてみましょう。救い主も困っている人たちのもとを訪ねられました。

—もっと良い聞き手になれるよう、訓練しましょう。

—友人や知人の枠を越えて、少なくとも週にひとりとは知らない人に話しかけるようにしましょう。

—愛に満ちた表情ができるように努力してみましょう。たとえ相手がどこのだれかわからなくても、その人が愛されていると感じられるような表情をして顔を合わせるように努力してみましょう。

—他人の成功や成し遂げた事柄と一緒にあって喜びま



しょう。

一たとえ都合が悪いときであっても、あるいは犠牲を要するようなどきであっても、奉仕の機会が与えられたならそれを明るく喜んで受けましょう。

一ぜひとも人助けをしたいと思っている人が周囲にいないか、見回してみましよう。あなたが助けを受けることのできる人はいないか、あなたが教えてもらえる人はいないか、考えてみましょう。

一何事にも感謝できるようになりましよう。

一手紙を書いたり電話をした方がいい人がいないかどうか考えてみてください。そして考えたことを実行してください。

一だれか特定の人のために祈ってください。天父とお話しするときには、自分の心に思い浮かべた人について祈ってください。その人があなたにしてもらいたいことがないかどうか、天父に尋ねてみましょう。

忘れられない経験

私は数カ月間、西アフリカのナイジェリアに住んでいたことがあります。私たちの支部にはひとりのかわいい女の子がいました。その子は7歳でしたが、体重はたった10キロしかありませんでした。私がああ借家の礼拝堂に入るたびに、その子はよく後ろの席に座っていました。私が好んでしたことといえば、その子を抱き上げ、一緒に前の席に連れて行き、集会の間ずっと抱いていることでした。それはまるでその子に、私の心の中にある愛がことごとく浸み渡るような感じでした。

あるクリスマスとき、私はいつものようにその小さな友人を抱いていました。すると、全員で「主は生けりと知る」（讚美歌 108番）を歌いますという発表がありました。そのとき、自分に向かって歌うのではなく、その歌詞にあるように、今抱いている小さな女の子に向かって歌いなさい、というささやきが聞こえてきたのです。私にとっては力強くもうるわしい、忘れられない経験となりました。あの子にとってもそうであってほしいと願っています。賛美歌の本を見ながら「愛に恵みつつ、願い聞くために」と歌っていたとき、このいたいけな少女の生涯にも、ほかの人の生涯にも、この賛美歌の中で歌われている偉大な祝福を、私という人間を通じてもたらすことができるのだということに気づいたのです。主のみ手の中の器として、私は心に弱さを持っている人がいれば、その人に慰めを与えることもできるでしょう。時間をさいて、人の嘆きを聞き、涙をぬぐい、心に喜びを与え、最後まで愛することもできるでしょう。それは、ちょうど賛美歌で歌われているように、救い主が私たちのためにしてくださっていることです。しかし、主は私もそのみ業に加わるよう望んでおられますし、喜んで奉仕の業に携わり、喜んで主のみ手の中で器となる

心を求めておられるのです。主は私にも立ち止まって人を助けるよう望んでおられます。さらに、私たちがこそって立ち止まり、困っている人々を助けるよう、そしてよきサマリヤ人になるよう、望んでおられるのです。

私たちはお互いを必要としている

私は、自分自身の祈りや願いの多くはほかの人を通じてその答えが与えられてきたということに最近気づき始めました。私たちはお互いを必要としています。与える者も受ける者も共に祝福を受け、神の息子、娘として一層親しい関係を築くのです。それについてマリオン・G・ロムニー副管長は次のように言っています。「豊かな人と貧しい人との間には、相互依存の関係があります。施しという過程を通して、貧しい人は強められ、豊かな人は謙虚になります。そして、両者が共に清められるのです。」（「聖徒の道」1983年1月号、p.169）

アフリカで使われているあいさつの中で私の印象に残っている言葉があります。人に向かって「お元気ですか」と尋ねると、その人は「あなたがお元気なら、私も元気です」と答えるのです。この言葉について考えてみると、まるで人々が、使徒パウロがコリント人への第一の手紙第12章で教えていることを理解しているのではないかと思わされます。パウロは、私たちはひとつの肢体だが多くのものからできている、そしてお互いにいつも大いに必要とし合っているのだと言っています。私たちの様々な人間性や強さや問題点や愛や経験が必要とされているのです。さらには「他よりも見劣りがすると思えるところ」（23節）さえ大いに必要としています。

「もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。」（26節）救い主は私たちに向かって、ほかの人を自分と同じように考え（教義と聖約38：24-27参照）、主が人を愛すると同じように人を愛しなさいと教えておられます。

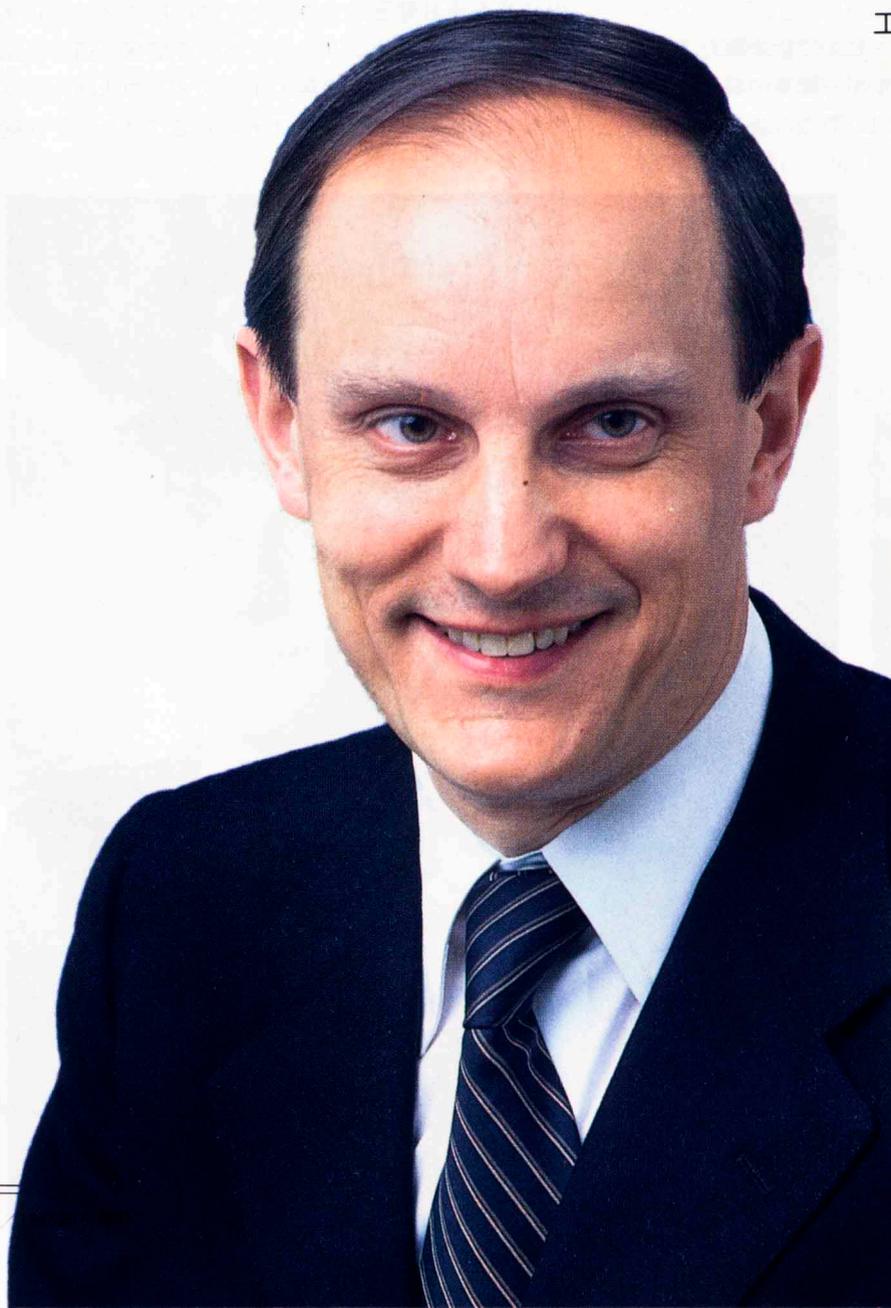
では、私たちはどのようにそれを始めればよいのでしょうか。まず、何事も進んで行なうことです。奇跡を起こしに行く途中で、映画館へ行く途中で、集会へ行く途中で、進んで立ち止まることです。すべての人の肩が軽くなるように、互いに進んで重荷を負い合うことです。悲しむ者を進んで思いやり、慰めがいる者を進んで慰めることです。（モーサヤ18：8-9参照）キリストのみ名を進んでその身に引き受けることです。それによって私たちの存在が明らかになり、私たちはその聖なるみ名で呼ばれるにふさわしい者となるのです。「私はキリストの言葉をよく味わえとあなたたちに勧めた。それはキリストの言葉は、あなたたちのしなくてはならないことをみな教えるからである。」

（II ニーフアイ32：3）□

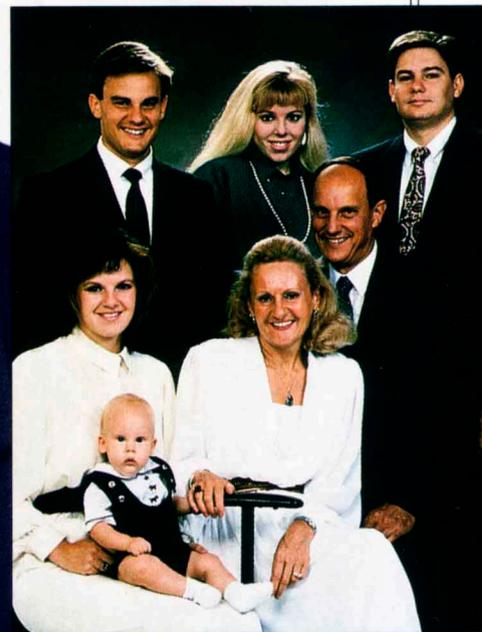
チャールズ・A・ ディディエ長老

——喜びをもって奉仕した半生——

エドウィン・O・ハロルドセン



中央がディディエ長老と妻のルーシー。
左側が長男パトリックとその妻カレン、
孫のリチャード。右側は次男のマーク
と妻のジオディー。



19 83年10月のことです。その旅行者は、フロリダ州のマイアミからアルゼンチンのブエノスアイレスへ向かっていました。13時間もの長く退屈な飛行の間中、機内食のほとんどを断っていました。彼には空腹を忘れるほど興味深いことがあったのです。それは、息子からの誕生日のプレゼントである「最高のものを求めて」という本でした。

この旅行者こそ七十人第一委員会のチャールズ・ディディエ長老です。ディディエ長老はアルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ地域の教会の代表管理役員として南アメリカへ赴任するところでした。飛行機がブエノスアイレスに着くころ、その本はほぼ読み終えていました。ディディエ長老は体を休めながら、待ち受けている責任について思いをはせました。

22歳のときに、母国ベルギーでバプテスマを受けて以来、ディディエ長老は、受けたすべての教会の責任に対して、全力を傾けてきました。彼は、良いことを喜んで行なう人だったのです。

1935年10月5日にベルギーのイーセルで生まれたチャールズ・ディディエ長老は、当時ベルギー陸軍の将校だった父親のアンドレーが第二次世界大戦の開戦直後に敵の捕虜

となったことをよく覚えています。脱走した彼の父は、身を隠し、時折不意に訪れる以外は、家族に会うことはありませんでした。ディディエ長老は、9歳の誕生日を迎えたころのことを振り返ってこう語っています。

「ゲシュタポ（ドイツの秘密警察）が父を捜していたので、私たちは取り調べを受けましたが、かろうじてのがれることができました。私たちは、父が隠れていたアントワープ地方へ行き、祖父と一緒に住むために、そこからフランダースへ行きました。」そのあと、ベルギーは解放されました。「自転車で逃げまどうドイツ兵、飛来する飛行機、銃撃、村にやってきた連合軍など、私はまるで昨日のこのように覚えています。」

少年時代のチャールズは、周りの人と同じように、カトリックの教育を受けました。そして、家族の中でただひとり、定期的にミサに出席していました。

家族がベルギーのナムールに住み、チャールズも中学を終えようとしていた1950年のことです。ふたりのアメリカから来た末日聖徒の宣教師が、家の戸をノックしました。チャールズの母ガブリエルは彼らを部屋に通し、話を聞きました。彼女は、次の年のイースターの休暇に、ブリュッセルの小さなバプテスマフォントでバプテスマを受けまし



たが、チャールズは、それには出席できませんでした。そのとき彼はカトリック教会主催の旅行に参加していて、法王に会うためにローマにいたのです。

チャールズは、支部の集会への招きは断わっていましたが、宣教師が教えていた英語クラブには出席し、「巽^{むな}にかかりたくなかったから」という理由で、青少年の夕べの活動が始まる前には、早々に帰ることにしていました。しかし、支部が行なう演劇に出演するように頼まれたり、母親からは日曜日には一緒に教会に行くようにと言われました。間もなく彼の妹のジャクリーンがバプテスマを受けました。それから彼は、リエージュにある大学へ行くために家を離れますが、そのときのことをこう語っています。「私はときどき青少年の活動に出席しました。いつもただ出席するだけで、積極的に何かをすることは望んでいませんでした。とても恥ずかしがり屋で、本当に人前に出たくなかったのです。」

そんな彼にバプテスマを受けるように勧め、会員同然の行ないをしているのになぜバプテスマを受けようとしなのかと尋ねたのは、宣教師のデューイット・パル長老です。そのときのことをディディエ長老は語っています。

「私は、その必要性が感じられないと答えました。生活を楽しんでいたのです。教会に出席するのはかまいませんでしたが、責任を負いたくはありませんでした。その宣教師は言いました。『モルモン経とジョセフ・スミスについて祈りましょう。もしあなたに証があるなら、バプテスマの必要性を認めると思います。』

そこで私たちは、そのことについて祈りました。私は、その祈りの答えとして証を受けました。祈りの答えは、光や声のようなものではまったくなく、ただ『行って、バプテスマを受けよ。ここに知恵あり、こは我が戒めなり』という確信でした。』1957年11月、チャールズは、ブリュッセルにあるプールでパル長老によりバプテスマを受けました。

ナムールからリエージュのブリュッセル大学に通い、1959年に経済学部を卒業しました。それからベルギー空軍

の予備将校訓練隊に入隊し、中尉、またレーダー指揮官としての軍務を終えました。

まもなく彼は、リエージュから数キロ離れた駐屯地に移ったときに、リエージュ支部で、茶色の目の少女ルーシー・ロドメスと知り合いました。ルーシーは、彼の妹とフランスで伝道した人でした。

軍務をすべて終えたあと、彼はルーシーとリエージュで結婚し、小さなアパートに引っ越しました。彼らは、1962年にスイス神殿で結び固めを受けています。チャールズは、木製品輸入会社で業績を上げ、ルーシーと共に教会の奉仕を通して成長しました。彼は、さらに多くの教会の責任を受け、そして100人の会員を擁するリエージュ支部の支部長に召されました。

リエージュでの5年間、チャールズは休む暇もありませんでした。そこで彼は、教師になるか、そうでなければ学校に戻りたいと思うようになりました。しかし、別の祈りの答えが与えられました。ドイツのフランクフルトへ移り、ヨーロッパの教会の地域監督であるジョン・カー兄弟の補佐として働くように求められたのです。

しかし、そこにいたのはわずか9カ月間でした。彼はリエージュへ戻り、教会の配送センターの管理をするようにとの要請を受け、再びリエージュ支部の支部長に召されました。

そして1970年3月、彼の人生を一変させるような出来事が起こりました。それはソルトレークシティーからの電話でした。

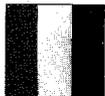
「電話は、N・エルドン・タナー副管長からでした。『主は、あなたを伝道部長に召されました。3カ月後にそこを発って、主が召される所ならどこへでも赴く準備ができていますか。』私は『はい』と答えました。」

このような予期せぬ電話は、引き続き彼の人生に影響を及ぼし続けました。それから3年後、フランス・スイス伝道部の伝道部長の職を解任される直前のこと、彼のもとに別の電話がありました。今度はマリオン・G・ロムニー副管長からのもので、ディディエ長老は地区代表に召され、同時にヨーロッパ全域における教会資料の翻訳、配送の管理者に任命されたのです。

それから、ソルトレークシティーでの総大会に出席していた1975年10月のこと、ディディエ長老は、今度はスペンサー・W・キンボール大管長が会いたいと望んでいるとの電話を受けました。こうしてディディエ長老は、その大会で組織された七十人第一定員会の会員に召されたのです。

「だれにでも将来の計画があります。なかには、想像していることが現実になり得ることもあるでしょう。しかし、教会幹部としての召しがくると、ドアを閉め、『今、私は100パーセント主のみ手にあります。主が望まれることを行ないます』と言うのです。」





ディディエ長老は、ヨーロッパの教会代表の管理役員となり、ブリュッセルをはじめ、14の伝道部を任されました。その後、カナダにおける教会の活動を管理する責任を受け、1981年には、アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイの伝道部とステーキ部を管理するよう任ぜられたのです。1984年に13の新しい地域会長会が召された際には、彼はブラジル、ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルーそしてボリビアを含む南アメリカ北部地域の地域会長の責任を受けました。

教会幹部としての彼の任務は、多くの時間と労力を要するものですが、彼は園芸、釣り、水彩画、料理、読書など様々な趣味を続けています。人はバランスのとれた生活をする必要がある、という信念を持っているからです。彼の

語学に対する興味は、価値ある財産といえましょう。母国語のフランス語に加え、彼は英語、ドイツ語、オランダ語、スペイン語を話します。

細身で快活なディディエ長老は、身体を常に健全な状態に保っています。健康を維持する努力をすれば、少しでも教会幹部に要求される激しい旅行に耐える助けになる、と彼は信じているからです。ディディエ長老は、七十人第一定員会のジーン・R・クック長老としばしばラケットボールをします。クック長老は、次のように話しています。

「彼はスポーツマンですね。よく水泳をしますが、プールを楽に30ないし40往復できます。毎日運動してますね。」

肉体労働も運動の一部になっています。彼が所属するワード部（ソルトレーク・エンザインステーキ、エンザイン第5ワード部）の監督であるリード・ヘイウッド兄弟は、ディディエ長老と息子たちが岩を運び、壁を作って自分たちの家を建て、庭も美しく整えたことを語ってくれました。

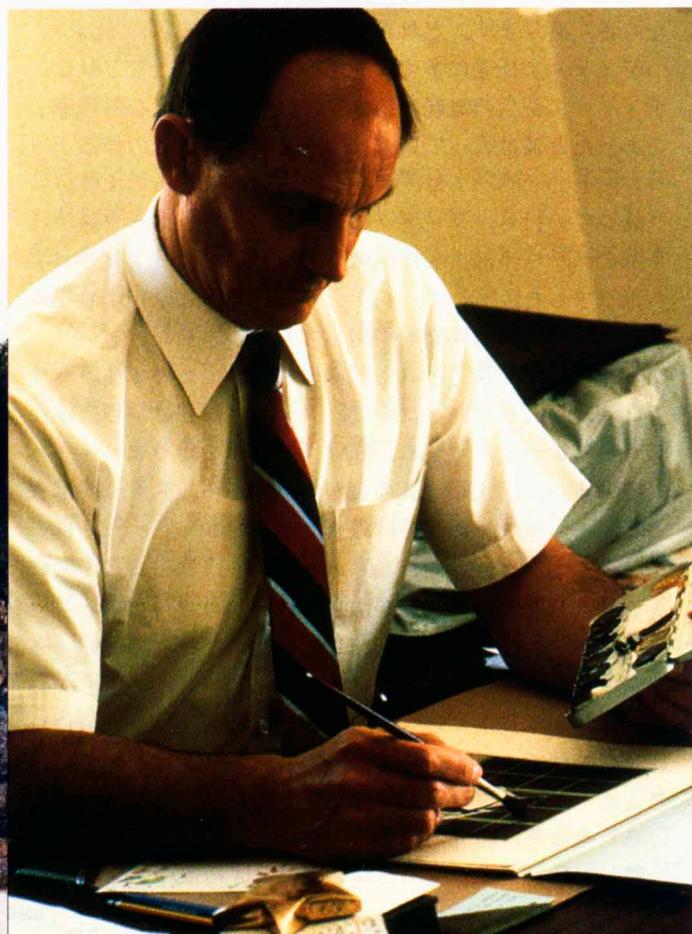
「私は、肉体的な労働の価値を信じています。私にはそれが必要ですね。」ディディエ長老はこう語ります。「ソル

●エジプトのカイロ、教会幹部としての責任を果たすために、ディディエ長老は世界各地を巡っている。





- ギリシア・アテネのマルスの丘、使徒パウロが新約の時代に伝道をした地である。(左下)
- ティティエ長老は、高度な技術を持つ芸術家としての一面を持っている。左の「羊の頭」は彼の作品のひとつである。



トレクシティーや南アメリカにいるときには、どうしても毎日8時間から9時間オフィスにこもります。エネルギーが余ってしまうので、それをラケットボールや水泳、絵画、夏には園芸などで発散したいのです。菜園を作りなさいとキンボール大管長が言われました。私はもともとだと思ひ、果樹を23本植えました。私は自然に返って、自分の手で土にふれることが好きです。」

ディディエ長老のます釣りに取り組むさまは、単に彼が自然を愛しているということだけでなく、彼の人生における様々な活動への取り組み方を示しています。釣りに行くときには、上達するように、自分よりも経験豊富な人と行くのです。「私には、まだまだ学ばなければならないことがたくさんあります。だれからも学ぶことができます。」

ディディエ長老に多くのことを教えてくれたひとりに、ディディエ長老の母親がいます。彼女は「偉大な料理家」であったと彼は言っています。ディディエ長老の作るチョコレートのデザートは、ディディエ家伝統のものです。

1983年の11月、ディディエ長老はフェアオークステーク部のステーキ部大会に出席するために、カリフォルニアへ飛びました。そして、ステーキ部長の家に予定より早く着いたので、家庭菜園を案内してもらいました。

「ベルギーでよくとれる西洋ねぎがあったんです。今まで作ったことがなかったので、ステーキ部長は料理方法がわからなかったんですね。私は『スープを作りましょう』と言いました。土曜の夜の会が終わってから、ステーキ部長と私はキッチンで、高等評議員やそのほかのステーキ部の指導者など22人分の西洋ねぎのスープを、次の日のために準備しました。彼らは私を教会幹部というよりはむしろ、スープを作った人として記憶しているのではないのでしょうか。」

ディディエ長老にとってのもうひとつの楽しみは、自分自身を捧げること、つまりほかの人に奉仕することです。息子のパトリックは語っています。「父は困っている人を助けるためなら、いくらでも時間を使います。」

隣りに住むヴィンス・ロジャーズさんはディディエ長老

のことを、「子供にすごくやさしい人です」と話しています。

ロジャーズ家族が休暇で家を留守にしていたときのことで、ディディエ長老夫妻はロジャーズ家の十代の娘エリザベスに内緒で、エリザベスの部屋の壁紙をすっかり張りかえてしまいました。エリザベスは、この思ってもみなかったプレゼントに喜びでいっぱいになりました。

ディディエ長老が近所の子供たちと遊ぶときのゲームに、「エレベーター」があります。子供を両手で抱えて、子供がディディエ長老のスーツの上のボタンを押したら高く差し上げ、下のボタンを押したら下ろすというゲームです。

ディディエ長老の行なっている奉仕の中に、自分の先祖への伝道があります。ディディエ長老は過去数年間、自分の親や妻の家系を調べるために、多くの時間を系図図書館で費やしてきています。ときには夜間、2時間、3時間もかけて調べることもありました。「私は、まだこの作業を続けていますが、いくつかのすばらしい成果を得ています。私たちは4代の家族の記録を調べ終えるための情報を全部得ました。次の段階は、神殿に提出することです。

彼は、たくさんの事を成し遂げても、さらに、よりよいものを目指すことを忘れません。

また、教会幹部という役職について、「自分も家族も毎日テストを受けているようなものですよ」と語っています。

「教会幹部は、教会の正式な代表者です。普通、会員たちは、私たちが何でも知っていると思っていますが、事實は違います。神聖な召しにこたえ、人々の期待と、またそれよりもっと大切な主の期待とに添う生活をするように、常に努力しなければなりません。これは、大きな課題です。」

この課題をふまえたうえでのディディエ長老の目標は、どのようなものでしょうか。それはまず、自分の家族のために最善を尽くすことができるようになることです。

2番目は、主の代理人として主のみこころに添った働きをし、みこころどおりに主の王国を築くことです。□

*記者として働いていたエドウィン・ハロルドセンは、現在いくつかの大学の報道学部で講師をしている。彼と彼の妻クレオはユタ州プロボに在住している。

モルモン経が与えてくれるもの

私が聖書を買おうと決めたのは、15歳のときでした。胸の中で不安がふくらみつつあった私は、自分が何のために生きているのかどうしてもその理由を知りたいと思ったのです。

私はよく空を見上げ、星を見つめては神はどこにいるの



私には 著者が わかりました

ロベルト・マネス

だろう、どんな方なのだろうと思いをめぐらしたものです。福音書の中のイエスのみ言葉を読んでいて、私はその言葉が真実であるという確信を持つことができました。また自分の歩むべき道もわかり始めてきました。聖句に愛着を感じ始めた私は、自分の得た大きな喜びを隠せず人々に分かち合うようになったのです。

私が強く心を打たれた原則は、癒しや奇跡、啓示の賜といったさまざまなみたまの賜を伴った信仰という原則でした。私は大きな信仰を持てば、人は実際に山をも動かすことができるという確信を得たのです。

そうした思いのとおりことになった私は、自分の喜びをすべての友人に分かち合いたいと思い始めたのです。私が自分の信仰と学んだ福音を最初に分かち合ったのは、親友のフランコという人でした。私たちはふたりでよく生命の神秘について話し合ったものです。しかしほかの友人たちは、あまり関心を示してはくれませんでした。

私はそうした宗教的な話題をとりあげて友人たちとよく

話はしていましたが、どの宗教組織にも加わることもなくただひたすら同じ道を歩み続けていました。なぜなら、私は主イエス・キリストへの信仰を強めていけば自分なりの答えを見いだすことができると考えていたからです。

私は、聖書を読んで学んだ事柄に対し確信を得ながら、自分が確実に霊的に成長していることを感じました。ところがそうした知識が私に新たな疑問を投げかけてきたのです。しかもその疑問に対する答えを私はどこにも見つけることができませんでした。

こうして真理を求め続けていたある日、私は家でほかの本と並んで置かれていたモルモン経という1冊の本を見つけました。その書物がどういう経緯でそこに収められたのか、私には覚えがありませんでした。おそらく数年前近所を訪ねてきていた宣教師が、母に渡していったものでしょう。

モルモン経を読み始めた私は、自分の中で何かすばらしいことが実際に起こり始めていることに気づきました。私は自分がすでに愛着を感じ始めていた聖典の著者と今見つけたばかりの新しい聖典の著者が同じではないかという気

持ちにかられたのです。この新しい聖典は、私がそれまで学んできた事柄にさらに確信を与えてくれるものでした。

私が経験した最も大きな祝福は、聖書を読んでいて浮かんでくるどんな疑問も、モルモン経を学ぶことによって解決したということです。聖書の中の聖句に光が与えられ、自分の理解力が高まりました。

この末日にモルモン経が与えられているという事実は、神が今なお奇跡を行なわれるという私の信仰を、確固たるものにしてくれました。

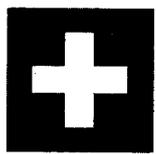
ある日、私は数人の牧師の訪問を受けたことがありました。私は、神が天使を通して人間に再び新たな聖典を与えてくださったことを、またその奇跡的な方法を彼らに意気揚々と伝えました。すると彼らのひとり、それらはすべて悪魔の仕業であると答えたのです。しかし私はどうしても彼らの意見を受け入れることはできませんでした。というのは、私はすでにそれまで読んできた事柄に大きな一致

を感じていたからです。当時私はエゼキエルの予言のことは知りませんでしたが、私はついふたつの木を受け入れることになったのです。ひとつはユダの木(聖書)、そしてもうひとつはヨセフの木(モルモン経)です。それらは私の手、私の心の中でひとつとなりました。(エゼキエル37:16参照)

以上のことは、モルモン経がどこの教会のものか何もわからないうちに起こったことです。イタリアのミラノの中心地で街頭集会を開きながらモルモン経の教えを伝えている宣教師に出会ったのは、その後私が18歳になってからのことでした。

それから数カ月後、私はそれらの聖典に導かれ、支えられて、バプテスマを受け、主の教会に入りました。□





スイスのサマリヤ人

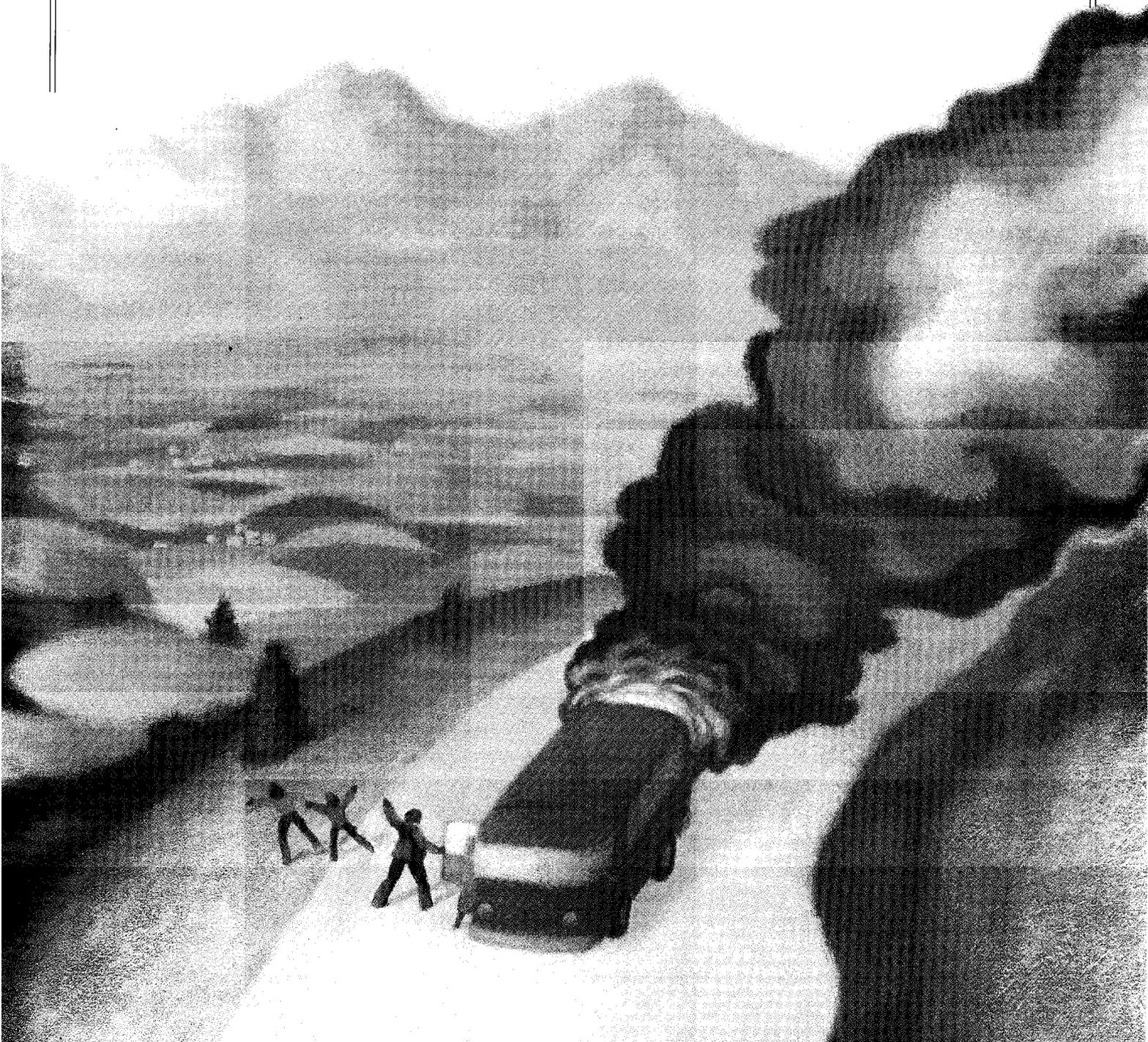
カレン・L・ブラウン

休暇を利用して、私たち家族が壮大なスイスアルプスにドライブに出掛けたときの事です。何の前触れもなく、私たちの乗っていたバンが急に動かなくなりました。夫のフロイドは、登山道路の方に車を寄せてエンジンをかけ直しました。と、突然ドーンというものすごい爆音がしました。

「大丈夫だよ。ただのバックファイヤーさ。」フロイドが

言いました。しかしふとバックミラーを見ると、車の下から炎が吹き出しているのです。しかもそれは車の後部まで広がっていました。

「車が燃えている。」私は思わず叫んでしまいました。「みんなすぐ車から降りるんだ。」状況をとっさに判断したフロイドは、ドアをあけるために車のまわりを駆け回りながら叫びました。16歳と6歳のふたりの娘は車から降りると、



安全な道路ぎわに走って行きました。次に裸足のまま^{ぼうぜん}呆然としている4歳の息子が父親の腕に抱かれ、いつ爆発するとも知れない、炎を吹きあげた車から避難しました。

私と赤ちゃんが最後に残されました。赤ちゃんのいのすのベルトをほどく時間は私にとって永遠にも思われました。フロイドの手を借りて外に出た私たちは一目散に走り出しました。

通りがかりの若いフランス人夫婦が立ち止まってくれたとき、車からは油臭い煙がもうもうと立ちのぼっていました。ご主人は助けを呼びに電話の方へ走って行き、奥さんは私と一緒に子供たちをなだめてくれました。

次に通りかかったのは、トラックの運転手でした。彼は、自分のトラックから消火器を取り出すと火を消し始めました。それから夫を手伝い、車からほとんどすべての荷物を運び出してくれたのです。しかし車の方はなおも燃え続けています。

そのうちに近所の農家の人々も騒ぎを聞きつけて方々から集まってきました。間もなく大型の消防車と警察の車がやってきました。たちまち消防署員によって火が消し止められ、私たちは残りの荷物を無事運び出すことができたのです。

故郷のカリフォルニアからはるか遠く離れたスイスの路上で、焼け焦げた車と散在したスーツケースを前に、私たちは途方にくれました。と同時に自分たちも荷物も無事であったことにほっとし、感謝しました。

「英語のできる方はいませんか。」夫は期待を込めて尋ねました。しかしそばにいた人たちはみなきょんとして肩をすくめるだけでした。

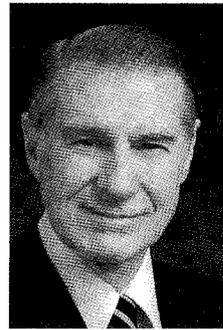
と、そのときひとりの男性とその息子さんが進み出ておぼつかない英語でこう言ったのです。「我が家においでなさい。」そして谷の向こうの小さな家を指さしました。彼の小さな車で二往復し、やっと家族全員と荷物が彼の家に落ち着きました。今知り合ったばかりのその人の奥さんは、私たちのために食事を用意し、疲労しきった子供たちをベッドに寝かせてくれました。また私たちの荷物の詰め替えまで手伝ってくれました。

彼女は英語が上手で、私たちは夜遅くまで話し合いました。彼らも末日聖徒であることがわかったのは、翌朝私たちが帰り支度をしているときでした。そのためか、私たちにとって彼らは一層特別な人たちとなりました。

休暇で出掛けたアルプスの山あいでのあの日の出来事は、忘れられない思い出となりました。私はあの恐ろしい体験を、そしてまた偶然に知り合ったあのスイス人家族（信仰を同じくする兄弟姉妹）や、彼らが私たちに示してくれた大きな愛を決して忘れることはできないでしょう。□

*カレン・L・ブラウン。主婦、カリフォルニア州エンサイタスワード部初等協会教師。

揺るぎな



十二使徒定員会会員

ジェームズ・E・ファウスト

純然たる揺るぎない信仰をはぐくむことで、私たちの成長や業績が制限されることはありません。むしろそのような信仰は私たちを強め、さらに一層の進歩を約束してくれることでしょう。

何カ月か前に私は別の教会幹部とあの美しいタヒチ島を訪れました。飛行機がパペーテ空港に着いたのが明け方の4時頃であったにもかかわらず、地区代表のピクター・ケイブ兄弟をはじめ地元の教会指導者たちが私たちを出迎えてくれました。私たちは急いで荷物をまとめ、その日に予定されている行事に備えるため、少しでも休息を取ろうとホテルに向かいました。

薄明りのなか、まだだれもいない道路をケイブ兄弟の車で走っていると、前方を横切る人影が見えました。ケイブ兄弟は車のスピードを落とし、その人が安全に渡れるようにしてあげてからこう言いました。「彼はここから少し離れたところにあるワード部の会員ですが、神殿に行くために急いでいるんです。9時にならないと最初のセッションは始まらないのですが、余裕をもって神殿に着いていたいと言っていますよ。」

「あの兄弟は神殿からどのくらい離れたところに住んでいるのですか。」私は尋ねてみました。「ほんの2、3ブロックです。」ケイブ兄弟はさらに、神殿職員が彼のために神殿の門を早く開けてくれること、彼がその美しい神殿の神聖な敷地の中で日の出を迎えていることを教えてくれました。

なんと強い信仰なのでしょう。彼はそこで瞑想をするために喜んで睡眠時間やほかのしたいことを犠牲にしてい

い信仰

るのです。「なんてバカなんだ。そんなに時間を無駄にするくらいなら、もっとゆっくり寝ることもできるし、ほかに勉強もできるのに」と思う人もいるでしょう。しかし私は、あの特別な瞑想の時間を通して彼がますます自分自身と救い主について多くを知ることができるようになって感じています。

このような純粋な揺るぎない信仰をはぐくむことは私たちにとって非常に大切なことです。私たちの信仰の基となる原則をすべて完全に受け入れることが必要です。それと同時に、多くの聖徒たちの迷いの元となっている子細な事柄や、一見矛盾に思われる問題に対して極度に神経質になることは避けなければなりません。時として私たちはそのような問題のいくつかについて答えを得ていてもそれを理解しようとはせず、ただいたづらに自分のプライドや知的好奇心を満足させるためだけにすべての答えを得ようとしていることがあります。

私たちは皆、真理を求めています。純然たる揺るぎない信仰をはぐくむことで、私たちの成長や業績が制限されることはありません。むしろそのような信仰は私たちを強め、さらに一層の進歩を約束してくれることでしょう。私たちに与えられている天性の素質や実行力は、新しい知識や成長によって常に増し加えられているからです。

ニーファイによれば、ニーファイの兄弟たちはある時期非常に邪悪になり、主のみたまに聞き従おうとしなくなりました。ひとりの天使を見、その語る言葉を耳にしたときでさえ、またその天使が静かな細い声で話しかけたときでさえ、兄弟たちは「なんらの感じもなかった」(I ニーファイ17:45)、と言っています。ニーファイはこれと対照的に、もし私たちが「キリストの言葉をよく味わ(うならば)……キリストの言葉はあなたたちのしなくてはならないことをみな教える」(II ニーファイ32:3)と勧めています。

手引きが破れるまで勉強しました

私には一緒に育ったひとりの親友がいます。彼は頭も良く何でもできたのですが、学校での教育には恵まれませんでした。家庭の事情や両親が子供の教育に対して熱心でなかったこともあって、きちんと通学することができず、基礎的な学業さえ修了することができなかったのです。その

後、彼はやつのことで中古のトラックを買い、2、3の建設業者に砂利を運び入れる仕事を始めましたが、季節によって仕事があつたりなかったりで収入はよくありませんでした。おまけにその古いトラックはよく故障し、その度に修理しなければなりませんでした。

やがて彼はすてきな女性と結婚し、ふたりで生活を始めました。経済的には楽ではありませんでしたが、何とか自分たちの家も建てました。

その当時私は彼の集っていたワード部の監督でした。私は彼をアロン神権定員会のアドバイザーに召しました。彼はその召しを真剣に受けとめ、手引きを破れるほど熱心に勉強したのです。彼の手帳には、ワード部のすべての若い男性がいつ神権昇進の年齢に達するかその日付が全部書かれていました。彼は常に少年たちに関心を示し、彼らが何をしているのか私にいつも教えてくれました。

何年かたって私が監督の召しを解かれたとき、彼は新しい監督会の一員として召されました。彼はこの召しにも忠実に応じ、後には監督に召され、素晴らしい働きをしました。

教会で奉仕するかたわら、彼は仕事の上での相棒を見つけ一緒にレンガの積み方を勉強し、レンガ建築の仕事を始めました。彼らの技術は優れていて、やがてあちこちから仕事を頼まれるようになりました。彼は仕事においても成功し、地元にあつて尊敬を受けるようになったのです。

長い間監督として立派に務めた後、彼はステーク部の高等評議員に召されそこでも強い信仰により献身的に奉仕しました。彼は高校を卒業することができなかつたにもかかわらず、今では優れた実業家として尊敬を集め、名声を博しています。大学へ行っていればさらに多くのことを成し遂げたでしょう。

なぜ彼はこのように大きな成功を取めることができたのでしょうか。勤勉であつたから？ 倹約家だつたから？ 自分の能力を信じていたから？ 確かにそうです。でもそれだけではありません。彼は心から熱心にまた忠実に主のみこころとみ旨を求め、それを行なうように努力したのです。彼は純然たる揺るぎない信仰を持っていました。

これより偉大な教師はいません

スティーブン・L・リチャーズ長老はこの点について次のように説明しています。「肉体と霊とが結合した不死不滅の霊魂は私たちの永遠の父なる神と長兄であるイエス・キリストの性質にあずかるようになります。」(1945年4月、総大会) 神の性質にあずかることによって私たちの才能や能力は強められ増し加えられるのです。永遠の父なる神とイエス・キリストの性質以上に偉大で力強い教師はいません。

予言者やほかの教会指導者もまた偉大な教師です。私は

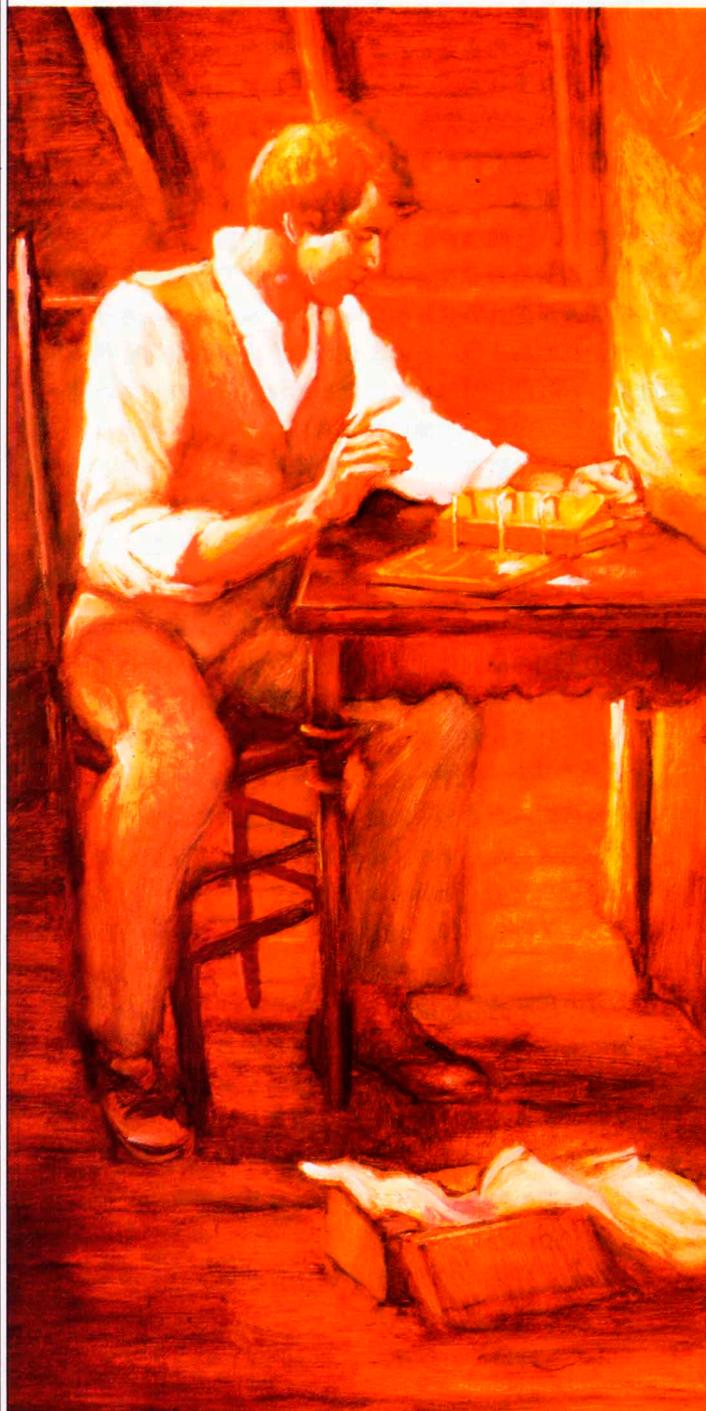
父 なる神の独り子イエスは、キリストであり、世の救い主、贖い主である。

ジ ヨセフ・スミスは真の神の予言者であり、彼を通して完全な福音が回復された。



モ ルモン経は神のみ
言葉であり、ジョ
セフ・スミスの言葉どお
り、私たちの宗教のかな
め石である。

現 在の大管長、エズ
ラ・タフト・ベン
ソン、また歴代の教会の
大管長は皆、回復された
真の教会の鍵と権能の正
当な継承者である。



教会幹部に召され総大会で壇上に座るようになる前、テレビやラジオを通して総大会の説教を全部聞こうとしたものです。ある大会のとき、私の息子がその土曜日の部会の説教についてセミナーのクラスで報告する割り当てを受けていました。私と息子はその部会での説教に真剣に聞き入っていましたが、終わってから息子が「指導者がほくらに伝えようとしていることは何だろうか？」と考え込むように言いました。最も大切な点を自分で理解しようと努力していたのです。

私たちは皆「指導者が私たちに伝えようとしているメッセージは何だろうか」と自問してみるべきです。生ける予言者は永遠という観点を私たちに示し、どのようにしたら世に勝つことができるかを教えてください。もし私たちがその言葉に耳を傾けなければ何も知ることはできません。与えられた勧告に従ってはじめて約束された祝福にあずかることができるのです。

私がまだ若くステーキ部長の責任を受けていた頃、ステーキ部大会に来られた教会幹部の方々に接する機会がたびたびあり、それはすばらしい経験でした。ヒュー・B・ブラウン長老が来られたのは彼が十二使徒に召されるちょうど1週間前でした。私たちはその大会でたくさんの愛と思いやりの心を感じました。大会のあと、ブラウン長老と車のところまで一緒に歩きながら私はこう尋ねてみたのです。「ブラウン長老、私に何か特別なアドバイスをいただけませんか。」

ブラウン長老の答えは、「わかりました。では指導者に従ってください」というものでした。それ以外に何も言葉を足したり説明したりされませんでした。これ以上力強い勧告があるのでしょうか。指導者に従うという強い信仰を持ちなさい、と。

私の祖母のメード・ウェッツェル・ファウストはよく小さな孫たちにプリガム・ヤング大管長のころの総大会の話をしてくれました。祖母はジョセフ・スミスを除けば、ヒーバー・J・グラントに至るまですべての大管長を見て知っていました。その長い経験から彼女は、「教会の指導者に背を向けて成功した人はひとりもいません。」と断言できたのです。

思い煩ってはいけません

教会の指導者の人間的な弱さについて教会を批判しようとする人たちがいます。イエス・キリストただひとりを除いて、過去から現在に至るすべての教会の指導者たちは確かに人間的な弱さを持っていました。しかし、ゴードン・B・ヒンクレー副管長が数年前に言われたように、「過ちを

強調し、ほかにたくさんある良い点を認めないのは風刺劇画を描くようなものです。そのようなものは確かにおもしろいかもしれませんが、下品で不愉快になることもよくあります。気品と美しさを備えた人の肖像画を描くときにその人の頬にあるいぼを実際以上に強調して描いてしまったらそれは正しい姿を伝えているとはいえません。」(「チャーチニュース」1983年7月3日付, p.11)

さらにヒンクレー副管長は同じ話の中でこう言っています。「初期の教会の指導者たちの中には何らかの間違いを犯していた人がいるかもしれません。また、至らない点があったかもしれません。にもかかわらずあれほど偉大なことを成し遂げたのです。なんと驚くべきことでしょうか。」今日でも同じことが言えます。

ウィルフォード・ウッドラフ大管長は聖徒たちが基本的なことにもっと関心を示すように切実に訴えかけ、次のような勧告を教会全体に与えられました。「神がだれであるか、アダムがだれであるか、キリストがだれであるか、エホバがだれであるか、そのようなことに思い煩ってはいけません。それ以上かかわるのはやめなさい。なぜそれほどまでに悩むのですか。神は神であり、キリストはキリストであり、聖霊は聖霊なのです。私たちはそれで十分とすべきです。もしそれ以上知りたければ、神と直接まみえるときまで待ちなさい。主の前にあって謙遜になりなさい。光と真理と神の王国の原則に関する知識とを熱心に求めなさい。」(「ウィルフォード・ウッドラフ説教集」pp.135-36)

「神の王国の原則に関する知識」を得るためには霊的に清い状態を持続させることが必要です。風刺や批判を避けなければなりません。現代はそれらが満ちあふれている時代です。ヒンクレー副管長は次のように言われました。「批判は離婚の前触れであり、反逆の生みの親であり、時として失敗の元凶となります。それは教会では不活発の原因となり最後には背教へと向かわせます。」(「チャーチニュース」1983年7月3日付, p.10)

いくつかの基本的な原則

霊的に清い状態、すなわち純然たる揺るぎない信仰を持つためには、いくつかの基本的な原則を真理として受け入れる必要があります。それには以下のことを信じるが含まれます。

1. 父なる神の独り子イエスは、キリストであり、世の救い主、贖い主である。
2. ジョセフ・スミスは真の神の予言者であり、彼を通して完全な福音が回復された。
3. モルモン経は神のみ言葉であり、ジョセフ・スミスの

言葉どおり私たちの宗教のかなめ石である。

4. 現在の大管長、エズラ・タフト・ベンソン、また歴代の教会の大管長は皆、ジョセフ・スミスを通して回復された真の教会の鍵と権能の正当な継承者である。

「どのようにしたら揺るぎない信仰を持ち、これらの原則の一つ一つが真理であると知ることができるのですか」という質問が出てくるでしょう。

それは、祈りと聖典の勉強、そして戒めに心から従いたいという敬虔な思いによって可能となります。

もう少し具体的に話を進めてみましょう。

第1の原則、すなわちキリストとしてのイエスは、すでに2,000年もの間様々なところで教えられまた信じられてきており、当面最も受け入れやすいものでしょう。聖典を学び、それについて祈り、イエスの教えに従おうとするならばそれが正しいことがわかります。

第2の原則、すなわちジョセフ・スミスが回復の予言者として召されたということについてはどうでしょうか。真理を熱心に探求する人にとっては、第1の原則よりも少しむずかしいかもしれませんが。ジョセフ・スミスの功績について正しく評価するためにはその全体を見る必要があります。ジョセフ・スミスが成し遂げた偉大な業を考えると、彼が目にしたと言ったものは本当に見たのであり、彼が自分の召しだと言ったものは本当に彼に与えられた召しだったと考えざるをえないと私には思われます。ジョセフがもたらしたものは、見る者すべてにとって明白であり、その業の神聖さを証しています。

第3の原則、すなわちモルモン経が真実の書物であるという証は、まさにモロナイが述べているようにキリストのみ名によって永遠の父なる神に尋ね求めるときに聖霊の力を通して与えられます。「もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確なものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」(モロナイ10:4)

第4の原則は揺るぎない信仰を享受するために極めて重要です。それはジョセフ・スミス以後の歴代の大管長がそうであったように、現代の予言者エズラ・タフト・ベンソン大管長も回復された教会の鍵を受け継いでいるということです。ある人々は救い主イエス・キリストを受け入れ、またジョセフ・スミスの神聖な召しやモルモン経を受け入れていながらも、ジョセフ・スミスが死んだ後の教会の指導者は道をそれてしまったと考えています。そう考えた人の多くはほかの人を煽動しましたが、その企ては成功していません。

鍵の継承

教会を導く権能が確実に引き継がれるために時代を越えて伝えられた確かな方法がひとつあります。救い主が十字架におかかりになったあと、前任使徒であったペテロが教会の大管長になったのがそれです。神権の鍵がジョセフ・スミスに回復されたあとの大管長の職の継承についてもこの方法がとられています。

十二使徒が使徒職に聖任されて十二使徒定員会の一員となる時、この地上の神の王国にかかわる一切の鍵を付与されます。しかしそのうちのいくつかは時の大管長が亡くなるまで効力が停止されます。大管長が亡くなったその時点で王国のすべての鍵は(個人にではなく)十二使徒定員会全体に移ります。新しい大管長が聖任され任命されるとき、十二使徒全員がその人の頭に手を置きその人が使徒の職に召されて以来止めておかれた鍵の効力を回復します。それはジョセフ・スミスがペテロ、ヤコブ、ヨハネから権能を与えられてからこのかた守られていることであり、エズラ・タフト・ベンソン大管長のときも例外ではありませんでした。

このような鍵と権能の継承により、私たちは心から、今日地上に神権の鍵がある以上、それはベンソン大管長のもとにあるとすることができるのです。

これら4つの基本的な原則を受け入れ、さらに教会で行なわれる諸儀式に参加し戒めに従うことによって、「この世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得ん」(教義と聖約59:23)という救い主が約束された祝福にあずかる確かな基が築かれるのです。

私はイエス・キリストの特別な証人として、父なる神と御子イエス・キリストが少年ジョセフ・スミスにみ姿を現わされたということ、ジョセフがこの地上に完全な教会を回復するよう命を受けたということを証します。またモルモン経の伝えるメッセージが真実であり神聖なものであることを証します。私はエズラ・タフト・ベンソン大管長が地上における神の王国の諸事を執り行なう鍵をすべて保持しておられると信じています。

バペーテで朝の4時に神殿に急ごうとして通りを横切っていたあの兄弟のように、私達も主の聖なる宮居で心からの安らぎと確信を得ることができます。純然とした揺るぎない信仰を持つことにより、私達たちは利己的であさましく貪欲なこの世を離れ、平安と永遠の生命へと導かれていくのです。□

(ブリガム・ヤング大学での講演より)



メキシコでの マラソン

ブリジッタ・A・ペレス

私にとって、決して忘れられない教訓となったひとつの経験をお話したいと思います。数年前、近くの町ジャルトカンとヒュージュットラの間で17キロに及ぶ「マラソン大会」が催されました。その大会の1カ月前、驚いたことに72歳になる夫のレオンが私にこう言ったのです。「少し走って体力を試してみようと思うんだ。それで大丈夫なようなら、マラソン大会に出られるからね。」

こうしてある朝早く、夫は区間を決めて走ることにしました。結果は上々でした。下り坂をコースに選んでいたのが割合に楽に走破できたのです。しかし私は、通常のマラソンコースのほとんどが上り坂であることを夫に話しました。でも家族の励ましもあり、夫はついにマラソン大会に出る決心をしました。息子たちは夫にランニングシューズをプレゼントし、ひとりには夫と一緒に走ることにしました。

11月26日、その日がやってきました。夫と38歳の息子を除けば、参加者はみな20代前半の人たちでした。スタートから夫はマイペースを保って走り続けました。義理の娘と私は2、3キロごとに水を手渡すために車で伴走しました。夫が10キロほど走ったところで、私は夫に言いました。「ねえ、おじいちゃん、ほかの人たちみたいにひと休みしたら」

「いや、休んじやられないよ。そんなことしていたらゴールインできなくなってしまうよ」夫の返事が返ってきました。こうして夫は一定のペースで走り続けたのです。

コースわきには大勢の観衆がいましたが、72歳の老人が走っているのを見て一様に驚いている様子でした。こうして15キロ地点を過ぎたころ、私はレオンに完走する力を与えてくださるようにと心の中で主に祈りました。「おじいちゃん、すごいぞ。あと2キロだよ」孫息子のひとりが声をかけて励ましました。子供たちも孫たちもまた沿道の人たちもみんなが夫に声援を送ってくれていました。

スタート時には32人いた走者のうち、完走できたのはレオンと息子を含む6人だけでした。1位になった若者のタイムは、1時間15分でした。夫は最後にゴールインし、息子は最後から2番目の成績でした。

レオンのゴールインとともに、子供たちからやんやの喝采かつが起きました。「やったぞ、おじいちゃん。バンザーイ」市長さんが彼に抱きつき、花火が上がりました。そして花火の音とともに楽隊の演奏が始まりました。間もなく72歳の偉大なスポーツマンが2時間15分かかって完走したことが発表されました。感極まって、私は子供と一緒に泣いてしまいました。レオンは賞金の半額を受け取り、残りを市の慈善団体に寄付しました。夫のそうした物惜しみない心と最後まで走り通そうとした決意は、子供たちにとってすばらしい模範となりました。

ある意味でこれこそが、すなわちゴールをめざして必死の努力を続けていくレースこそが人生だと思います。私たちもこの世での生活を立派に終えた暁には、ちょうど子供たちが喝采を送って夫を迎えたように、天使たちに喜びの歌を歌ってもらえることでしょうか。そして市長がレオンを抱きしめてくれたように、主は喜んで私たちを受け入れ、腕をまわしてこう言ってくださるに違いありません。「ようこそ、良い忠実な僕よ」と。

沿道で声援を送ってくれた観衆のように、教会の指導者は、人生を歩む私たちを励まし、力づけ、生ける水を与えてくれます。そして予言者である彼らは、こう語りかけてくれるのです。「勇気を出しなさい。堅く立って気落ちしないようにしなさい。終わるまで耐え忍ぶならば、あなたがたは永遠の生命を得るでしょう」と。□

*マラソン大会が行なわれた当時、レオン・ペレスはメキシコのメキシコシティー北部伝道部サン・フェリッパ・オリザトラン支部の支部長であった。

真実の光

マルチーナ・シューバル



ともありました。また来る日も来る日も自分を哀れんで暮らしたことも、神がこのようなことをされるはずはないと言って神の存在を否定したこともありました。そう、何もかもが見えず、暗闇の中を手さぐりしているまったくの盲人になってしまったことがあったのです。

私には明らかに大きな悩みがあります。その悩みは、まず朝ベッドから起きたときに、着ようとする服が自分に合っているのかわからないといった悩みからはじまり、やって来たバスが自分の乗るバスなのかわからない悩み、思いどおりに仕事が進まない悩みなどいろいろです。そして、そんな私に周りの人々はどう接したらよいかかわからずに戸惑ってしまうのです。

しかしこのようなことは些細なことで、たいした問題ではありません。人生において真に大切なものは、肉眼では見えないものです。確かに私は皆さんよりも狭い世界に住んでいます。しかしそのような世界にも、私にとっては人生そのものである貴重なものがたくさんあります。すなわち私たちは神の子供であり天父は私たちを世のいかなる言葉をもってしても表わし得ない深い愛で愛してくださっているという確信、末日聖徒イエス・キリスト教会が唯一真実の教会であり、神の予言者を通して啓示が受けられるという確信、そして亡くなったキリスト・イエスが私たちの罪を贖うために復活され、私たちに永遠の生命を与えてくださるという確信がそれです。私の心の中には守られているという安心感があります。またそのような知識があることに、私自身喜びと平安を見いだしています。

私にはその比類ない美しさを十分に理解することはできないかもしれませんが、福音に対して大きな喜びを感じています。そしてその福音の輝きを思うとき、私は驚嘆せずにはいられないのです。私はその輝き（光）を、今奪われている光と取り換えたいとは思いません。

これから直面するであろう困難や悲しみを思うとき、私は次の救い主の言葉に心が慰められるのです。「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」（マタイ11：28）

主が私たちに休息と安らぎを与えてくださるとはなんといい慰めでしょうか。このような知識があれば、人生は豊かで美しい、生きる価値のあるものになるに違いありません。□

い つだったか、だれかが私にこんなことを言いました。「あなたは生まれてこなかった方が良かったわね。これまで受けてきた苦しみや失ってきたものを考えてごらんなさいよ。」

深く傷ついた私は反発して言いました。「でも人生は楽しいわ。」

友人がすかさず言い返しました。「でもいつもそうとは限らないわ。そうでしょ。」

今までの自分を振り返ってみると、この友人の言うとおりでした。確かにいつも楽しいときばかりではありませんでした。盲人である私は、実際絶望に陥ったことも、夜泣きながら眠ったことも、何カ月も無感動のまま過ごしたこ

その言葉は成就する

エリカ・ハイマン

1973年、私は主人と一緒に教会に入りました。バプテスマを受けたのは、当時2歳だった一粒種の男の子を心臓病で亡くしたあとでした。子供がほしいという望みは、福音の原則から新たな知識を得てさらに強まりました。

1年後に受けた祝福師の祝福の中で、もし私が信仰をもって主を呼び求め、ふさわしい生活をするならば、主は複数の子供を授けてくださると約束されていました。

1976年、私は妊娠しましたが4カ月半で流産してしまいました。

1982年、祝福師の祝福を受けてから8年目に男の子が生まれ、クリスチャンと命名しました。帝王切開で生まれた未熟児の彼は、体重がたった800グラムしかなく、医師たちから助かる見込みはほとんどないと言われました。しかし、クリスチャンは主人から神権による祝福を受けると、目に見えて快方に向かい、医師たちを驚かせたのです。

出産後3日目に、初めてクリスチャンに会うことになっていました。わが子を一目見たいと、どんなに望んだでしょう。目がさめたのはまだ夜中の2時半でした。とめどなく流れる涙でほおをぬらしながら主に助けを求めました。「ご在天の父なる神様、どうかあの子を死なせないでください。私から引き離さないでください。」さらに「でも、もしそれがみこころならば、お父様、あの子の死を受け入れます」とつけ加えました。

その朝、主人が病室に来てクリスチャンが午前2時45分に息をひきとったことを私に告げました。その喪失感は耐えがたいもので、私たちはふたりで泣き、また祈りました。私たちの祈りにこたえるかのように、私たちは温かい平安な気持ちに包まれるのを感じました。

病院で私は祝福師の祝福を何度も読み返しました。確かに、祝福を受けてからすでに子供をひとり授かりました。しかし祝福師の口から出た言葉には、主が私たちに複数の子供を授けてくださるとあったのです。でも私たちはもう35歳になっていましたし、ふたりの子供を亡くしてすっかり落胆していました。

しかし1984年、クリスチャンの死後2年目に女の子が生まれました。私たちの最愛の娘です。生まれるときは非常に難産で死ぬ思いをしました。

私は、幼くして亡くなったふたりの息子が霊界で私たち

を待っていてくれることを知ってうれしく思いますし、まだ小さな娘がもうお祈りの言葉が言えるようになったことを喜んでます。もし主が私たちにもっと子供を授けてくださるなら、喜んで受けたいと思っています。

回復された福音は真実です。この福音は私たちの生活を豊かにし、幸福にしてくれたのです。□

その人たちは それが最後の儀式だと 思っていました……

リチャード・L・エメリー

私がシャロンという女性を知ったのは、交通事故でけがをした彼女に儀式をするよう監督から依頼を受け、地元の病院を訪れたことからでした。私はその日ちょうど、自分の会社からかなり離れた所にあるその同じ病院に入院している別の姉妹を見舞って戻って来たばかりでした。会社の仕事を終えていなかった私は、再び同じ病院に足を運ぶことに気が進まず、煩わしささえ感じていました。病院に車を走らせたものの、どうも積極的な気持ちにはなれませんでした。

シャロンと子供たちの乗っていた車は、休暇の旅行先から家に帰る途中、大型トラックと正面衝突してしまったのです。

この事故でシャロンは目頭を深く切り、腕と鼻を折り、内臓を損傷し、頭蓋骨骨折という重傷を負いました。さらに息子がひとり即死し、もうひとり足は骨折するという大事故だったのです。幸いにも夫とほかのふたりの子供たちは軽傷を負っただけでした。

病院の救急治療室に運び込まれたシャロンをひと目見た医師は、彼女がもう助からないことをスタッフに告げていました。しかしシャロンは神権の祝福を願っていました。

私が病院に着くと、ワード部の依頼を受けて祝福の儀式を手伝うために駆けつけた兄弟が私を待ち受けていました。

彼はシャロンの頭に聖別された油を注ぐ箇所を探しましたが彼女の頭の損傷がひどいため、なかなか思うようにはいかないようでした。やっとのことで彼は頭の片側にきれいな箇所を見つけることができました。

私は彼女を祝福する言葉を必死で探し求めました。これ

まで死にかけている人に祝福を受けた経験のない私は、何をどう言ったらよいのかまったく見当がつかなかったからです。私はみだりに導かれるままに語ることにしました。私は彼女が元気になって育児ができるようになること、彼女の地上での使命がまだ終わっていないこと、彼女が家族にまだ必要とされていること、けががすみやかに回復することなどを約束したことを覚えています。

この祝福の言葉に、看護婦やシスターなど、救急治療室内の人々は一様に驚いたようでした。その人たちはこれを彼女に対する最後の儀式だと思っていたのです。私たちが重体の彼女に向かって回復する^{あぜん}などという言葉かけたので、彼らは啞然としてしまったのでした。

祝福のあとで私たちと言葉を交わしたシスターのひとり、シャロンに回復の見込みがあるという私たちの思いを知って喜んでくれました。そして翌日、そのシスターから私に電話がかかってきました。シャロンが私に会いたがっているというのです。

病院に行ってみると、彼女はベッドの上に起き上がっていました。顔には笑みさえ見せ、目は輝いていました。彼女は私に祝福してくれたことを感謝し、聖句を少し読んでくれるように頼みました。帰りぎわに、顔からはずれかかっている酸素マス

クを直すように頼まれた私は、彼女の頭のバンドに手をかけました。不思議なことに、彼女の頭には傷を受けたような様子がないのです。血がにじんだあとも骨折したようなあともなく、まったく正常に見えました。

それから2週間後、シャロンは腕を三角布でつるし、額に小さな包帯を巻いただけで病院から外へ歩いて出ることができたのです。この出来事は、私たちふたりにとって貴重な経験となりました。またシャロンにとっても、それは神権に対する彼女の並々ならぬ信仰を表わすすばらしい機会となりました。そして何よりも私はこの機会を通して、求められたならいつでもすぐに、神権者としての業を行なおうという決意を新たにしたのです。□



質 疑 応 答

本誌の答えは問題解決の一助として与えられたものであり、
教会の教義を公式に宣言するものではありません。

私たちを見守り、守護してくれる「守護天使」がいるというのは本当でしょうか。



回答者

ラリー・E・ダール

(ブリガム・ヤング大学
教会歴史および教義学部準教授)

私たちの聖典には「天使」あるいは「導きと恵みの天使」といった言葉はたびたび出てきますが、「守護天使」という言葉は出てきません。

聖典の中では、モルモンが「導きと恵みの天使」の役目を次のように証しています。「天使が現われて人に導きと恵みを伝えることもまた信仰によるのである。もしこのようなものが終ってすでに無い時がくるならば、それは不信仰の結果……である。」(モロナイ7:37)

聖典によれば天使たちは「神のみ業と栄光に関する出来事を知らせ、証するために」(マタイ1:20-21, 28:1-6, ルカ1:11-20, 2:8-14, 黙示14:6-20, 教義と聖約88:92-110 参照),

「主が選びたもう者にキリストの御言葉を伝え、その者たちにキリストの事を証させる」ために(モロナイ7:31, モーサヤ3:1-27参照),

地上に「その権能、その鍵、その誉、その威厳、その栄、その神権の権能を」もたらすために(教義と聖約128:21, 教義と聖約27:12, 110:11-16, ジョセフ・スミス1:

68-70参照),

また神の僕たちがそれぞれの目的を果たすことができるよう、彼らが困難に遭遇したときにみ守りと導きを与えるために(使徒5:18-20, ダニエル3:28, Iニーフアイ3:29, ヒラマン5参照),

忠実な人々に必要に応じて慰めと指示と警告を与えるために(創世16:7, 出エジプト23:20-23, マタイ2:13, 19-20, Iニーフアイ11:14-15:30, アルマ8:14-18参照)人々に現われ、導きと恵みを施すと記されています。

ではここに出てくる天使とはだれのことでしょうか。主は次のように言っておられます。「現にこの世に属したは^{かつ}嘗て属したる者にあらざるはなし。」(教義と聖約130:5)それは、まだこの世に生を受けていない霊、またはかつてこの世に生を受けながらまだ復活していない霊と考えられます。また復活したか身を変えられた者で、触知し得る肉体を持っている者とも考えられます。

ジョセフ・F・スミス大管長は、地上の人々に恵みと導きを施す天使についてこう語っています。「この地球に住む

者たちに導きと恵みを施すために使者が送られてくる時、使者は見知らぬ者ではなく、私たちの親戚、友人、同じ存在、同じ僕、仲間から来るのである。この世を去った古代の予言者たちが地上の同じ存在を訪れるのである。この世を去った古代の予言者たちが、アブラハム、イサク、ヤコブを訪れ、山上で救い主を待ち、導きと恵みを施した聖なる存在と言った方があなたがたは好むかもしれないが、そのような存在である。……この地球を去り、忠実であってこの権利と特権を享受するにふさわしい私たちの父親、母親、兄弟姉妹、友人は、肉体において愛を培った人々に対し、神のみ前より、愛、警告または叱責、教えの言葉をもたらすために、再び地上に来てその親戚や友人を訪れる使命を受けるかもしれない。」(『福音の教義』『導きと恵みを施す天使の特質』pp.417-18)

では私たちに、この世にいる間常にそばにいる特別な「守護天使」がついているのでしょうか。

1973年の総大会で、ハロルド・B・リー大管長は、目に見えない天の使いから祝福を受けたことを次のように語っています。

「私は潰瘍を病んでいて、それは日増しに悪化していた。私たちはそのとき伝道部を視察中であつたが、ある日の朝、妻のジョーンも私も、できるだけ早く家へ帰るようという靈感を受けた……その帰途、私たちが飛行機の前部座席に座っていたときのことである。何人かの教会員が次のセクションに座っていた。ところがある所までくると、だれかが私の頭の上に手を按くのである。そこで私は顔を上げて見たが、そこにはだれもいなかった。家に着く前に、また同じことが起こり、再び同じ経験をした。それが一体だれであつたのか、また何によつたのか、私にはわからなかつた。しかし数時間後、私は自分がそのとき祝福を受けていたことを、しかも最も必要とする祝福を受けていたことを知つたのである。家に着くとすぐに、妻は非常に心配して医者^{かいよう}に電話をかけてくれた。医者が私に電話口に出てくれと言つたので出てみると、気分はどうか、と尋ねてきた。私は「ひどく疲れている。でも、大丈夫だと思う」と答えた。ところがその直後、私は大量の血を吐いた。もしそれが飛行中に起こっていたら、私は今日、こうしてここに立ち、この話をする事はなかつたであろう。」(『汝ら聖なる所に立つべし』『聖徒の道』1974年3月号、p.140)

リー大管長はまた教会の若人に、「神の守護天使」の助けがあることを約束してくださっています。

「若人の皆さん、私たちは共に船で旅に出ているようなものです。……自然の猛威が力を奮い、嵐が巻き起こるかもしれません。それは船が難破してしまうほどの精神的、情緒的嵐かもしれません。それが何であれパウロのように、長い間の断食によって強められる信仰により、悩み多い『夜』に、皆さんは『仕え拝んでいる』神の『守護天使』

を身近に感じることでしょう。」(『立派な人生を送るための決意』pp.79-80)

ジョン・A・ウィットソー長老は、私たちに「守護天使」がついているかどうかというテーマをとりあげ、次のように語りました。「天使たちがしばしば私たちを事故や危害から、あるいは誘惑や罪から守ってくれるということは疑う余地がありません。そのような使いたちを『守護天使』とでも呼ぶべきでしょうか。多くの人々が肉のまなこでは見ることのできないところから導きや守りを受けてきたことを証していますし、今後もそれは続くでしょう。聖きみたまを常に伴侶とすることによって得られる助けや聖き天使たちからの援助がなければ、私たちの人生の悩みは大いに増すことでしょう。

しかしながら、この世に生を受けたすべての人々に、常にみ守りを与える守護天使が与えられているという一般に流布している考えには、明確な根拠があるわけではありません。……あるいは、私たちに特別な援助を与える使命を受けたときのみ訪れる天使も『守護天使』といえるかもしれませんが。しかし私たちが常に聖きみたまを伴侶としていれば、そうした特定の天使を伴侶とする必要はなくなるのではないのでしょうか。

したがって、さらに詳しい知識が与えられる日まで、天使は私たちの必要に応じてみ守りを与えるために遣わされてくるということはいえるとしても、すべての人々のそばについてみ守りを与える特別な守護天使がいるということは言明できないのです。」(『インブループメント・エラ』1944年4月号)

今日でも、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長とブルース・R・マッコンキー長老は共に、生活の中で危機に瀕した人々には導きと恵みの天使の助けが与えられると言っています。しかし彼らの言葉によればこの世の人々にとっての本当の守護天使は、キリストの光と聖霊を通して得られる力と導きなのです。(ジョセフ・フィールディング・スミス著「救いの教義」第1巻第3章、p.53参照)

以上のことから次のようにいことができます。

(1) 私たち一人一人は皆、キリストの光と聖霊を通して常に守護の力を受けることができる。

(2) 恵みと導きの天使は、主の僕や忠実な人々のもとへ危急の際の導きや慰め、み守り、指示を与えるために遣わされてくる。

(3) 目に見える見えないにかかわらず、私たちに導きを与えてくれる天使は、私たちの状況をよく知り、私たちの幸福を願っている、すでに世を去った家族であることもある。

(4) 天使の導きと恵みを受けるためには信仰が欠かせない。□

聖餐の祈りの中で、私たちは「イエス・キリストを常に忘れない」と約束しますが、どのようにすればこの約束を守ることができるでしょうか。



回答者

ドーレン・ウーリー

(ネバダ州ラスベガス在住
セミナー教師)

私 たちは聖餐の祈りの中で、(1) キリストの肉と血の「記念として」聖餐をいただく、(2) キリストのみ名を身に受け、御子を常に忘れない、(3) 戒めを守る、という3つのことを約束します。(教義と聖約20：77-79参照)

これを守るとき、主は私たちにみたまを常に注ぐと約束してくださっています。なんとすばらしいことでしょうか。では「忘れない」または「記念として」何かをするとはどういうことでしょうか。

辞書には、「忘れない」とは思いを「心に引き戻すこと、再度思うこと」、「注意や考えを心にとめること」、「記憶にとどめること」と定義されています。つまりキリストを「忘れない」ということは、キリストのことをしばしば思い起こし、そのみ教えと私たちの罪に対するキリストの贖いに心を向けるということです。キリストご自身とキリストの贖いに心を向けることによって、私たちは自分が御子と交わした誓約をどれだけよく守り、どれだけよくみ教えにそった生活をしているかを自己評価するようになります。そうするとき私たちがみたまを伴侶とすることができ、一層主に近づくのです。

デビッド・O・マッケイ大管長は、聖餐にあずかるということには次の3つの基本的な意味があると述べています。

「第一は、己れを知ること、すなわち己れを吟味することである。各々は自分がふさわしいかどうかを十分に吟味し、ふさわしい状態で聖餐にあずかるべきである……。

第二は、誓約を交わすということである。

そして第三はもうひとつの祝福、すなわち主を身近に感じることができるということである。」(1946年総大会)

このように、聖餐にあずかるときは、これからもキリストの模範に従うという新たな決意をしながら過ぎたことに思いを馳せ、現在の自分を瞑想するのです。しかもそのような努力をしているのが自分だけではないことを知れば、心が安らぐに違いありません。私たちは天父から助けと力を受けることができます。このことを知ったアンモンはこのような言っています。

「私は自分のことを誇らないでただ私の神のことを誇る。それは神のたもう能力によって何事もすることができからである。」(アルマ26：12) 聖餐にあずかることにより、また、キリストを思い起こすことにより霊的な力が増し加えられ、私たちは自分の思いや感情、行動をコントロールしやすくなります。

主を「忘れない」ということは、主をよく知ることです。私たちは聖典を読み、「キリストの言葉をよく味わう」(II ニーフアイ32：3) ことによって一層よく主を知る

ことができます。主をよく知るもうひとつの方法は、主の模範に従うことです。私たちの行ないがキリストのようになればなるほど、私たちに対するキリストの深い愛が伝わってきますし、キリストのような愛し方で人々に接することができるようになってきます。モルモンはこのように教えています。「この愛はキリストの純粋な愛であって永遠につづくものである。従って終りの日にこのような愛を持っている人はさいわいである。それであるから、私の愛する兄弟らよ、あなたたちは、神が御子イエス・キリストに真に従う者たちに一人のこらずあたえたもうたこの愛で自分たちの胸を満すためにありたけの心をつくして御父に祈れ。これはまた、あなたたちが神の子らとなるためである。神の現われたもう時には神をそのありのままの姿で見るにちがないから、その時には神に似た者になることができる……。」(モロナイ7：47-48)

私たちが真実の愛を持っていれば、一つ一つの行ないの中にキリストを思い起こすはずで、また私たちのなす選択や生活は、キリストのみこころを反映したものとなり、日々の行ないはキリストに倣ったものとなり、文字どおり「墮落したる肉欲の有様より^義しき有様に移り、神に贖われて神の息子または神の娘」(モーサヤ27：25)となるのである。

この原則をよく理解している人々は私たちの周囲にたくさんいます。私の知っているある姉妹は最近、盲人のためのある集いでボランティアとして案内役を務めました。ほかにも大勢の教会員が他の宗派の人々と一緒になって、参加者を実習室や受付に案内する手伝いをしました。しかしこの姉妹の働きはこの集いだけではありません。彼女は身寄りのない孤独な女性の友達となって買い物や雑事を手伝い、通院の手助けをしました。そしてその女性が重病に伏すと、今度はベッドの傍らで慰めを与え続けました。そしてその女性が亡くなったあと、彼女は葬儀のすべての手配をし、その女性が話していたひとりの親戚に連絡を取ったのです。

その献身的な働きは、他のボランティアたちがその集いで見せてくれたものをはるかに超越したすばらしいもので

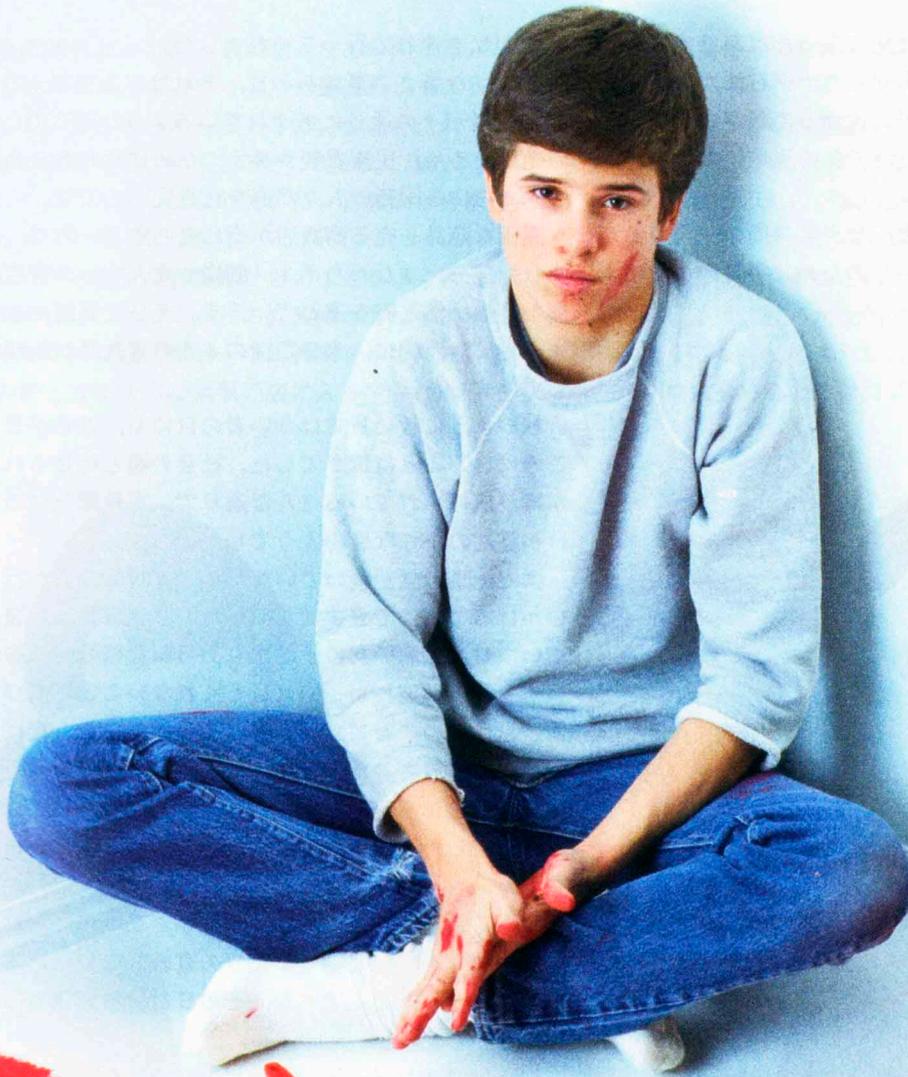
した。彼らはその場の必要を満たしただけでしたが、彼女はそれ以上の、実にキリストのような奉仕をしたのです。キリストを「忘れない」(思い起こす)とはまさにこのようなことをいうのではないのでしょうか。それはすなわち、キリストに従われ、教えられた原則を実践することであり、もっともっとキリストのようになることなのです。キリストのように行なうことによって私たちの理解力は深まり、私たちの奉仕の能力は高められます。また「肉欲の有様」(モーサヤ3：19参照)を遠ざけ、みたまのささやきに従うようになります。

主に思いを向けるということはある意味で、コンピュータに情報を入力するようなものです。キリストに倣った行ない一つ一つが私たちの記憶を「プログラム」し、必要に応じて呼び出せるようにしてくれるのです。私たちがそのような行ないをたくさん入力しておけば、「呼び出す」のが容易になり、正しいキーを押せば自動的に情報が出てくるコンピュータのように、無意識のうちにそうした行動がとれるようになるのです。

主を「忘れない」という原則がまだ十分に理解できず、それがキリストを愛することとどうつながりがあるのかよくわからない場合は、そうしたことを思い起こさせてくれるものに触れてみることです。聖餐や聖典、キリストの絵、神殿、教会幹部、ふさわしい音楽、家庭の夕べ、奉仕、個人または家族の祈り、主のみ名を身に受け、主の属性を身につけるよう努力することなど対象は様々です。

主は私たちに「わが前に徳と聖きを履み行うべし」(教義と聖約38：24)と命じておられますが、私たちが一夜にして完璧になることはできないことを主はよくご存じです。大切なのはそれをめざしてひたすら「実行」することなのです。毎週聖餐を受ける度にキリストを思い起こすようにすれば、キリストの模範に従いやすくなります。そしてキリストに従うようになると私たちはますますキリストのようになって「恩恵に恩恵を加えられ」、ついにはキリストにあって神の完き栄光が受けられるまでに高められるのです。(教義と聖約93：11-20参照)

「でも、道はある」



罪は、私たちが袋小路に追い込む。
そこから逃れる道は、ひとつしかない。
それは、悔い改めの道。

19 75年の夏、当時25歳の私は父を失ったばかりでした。父は世界の各地に利権を有するカナダ石油ガス産業に携わっておりました。そこで母に代わって私がヨーロッパまで行き、かなりの期間にわたって父の現地での仕事の整理のために滞在しました。

何時間にも及ぶ商談が終わると、ビジネス街の一角のある有名な下町の繁華街へ、気晴らしのために毎日のように

同僚が私を連れて行ってくれました。

記録的な暑さの夏のある日、それはまるでヨーロッパ中の旅行者がその通りにあふれているような感じでした。その光景たるや、民族衣装や暑さのために肌もあらわな服装の、あらゆる国籍の人々が道を行き交うのです。

高価な商品を売る高級店が街に立ち並ぶ一方で、人生の汚れた部分、すなわちポルノ劇場や成人向けの書店、居酒屋なども公然と軒を連ねています。そして周囲のすべてとまったく対照的に、末日聖徒の4人の宣教師が街頭伝道をしていました。

私のように教会員ではない者の目にも、彼らがそんなところにいることは驚きでした。社会の悪と称せられるものが繰り広げられているこんな通りで、宣教師たちの一角だけが靈性の小さな^{とりで}砦のようでした。

まだ仕事の話が続いていたため、宣教師の方へ行って話しかけることはできませんでしたが、私はじっと彼らを見ていました。若い女の子が肌もあらわな格好で道を歩いていても、若い彼らが一向に目もくれないことに気づきました。私はそのことにひどく感銘を受けました。夜になって仕事から解放されたら、戻って彼らと会ってみようと思いました。ところが私が捜しに行くと、いつも彼らは立ち去った後でした。彼らには会えないのではないかとさえ思いました。

用事で2、3日その町を留守にしてから戻った私は、あの同じ通りを歩いているふたりの宣教師を見かけました。あとでわかったことですが、その日は彼らの休みの日だったらしいのです。

彼らはウィンドー・ショッピングをしながら歩いていました。私は彼らの後をつけて、ふたりが買おうとしていたものが何か確かめることにしました。彼らが見ていたものは靴やコートで、本屋に立ち寄って買ったのは教科書だけでした。酒場やいかかわしい文学や芸術を売り物にしている店には目もくれませんでした。

私は翌日から翌々日には街頭伝道中の宣教師に会おうとしましたが、急に仕事が片付いてカナダへ戻ることになりました。

家に着いたころには、宣教師を見ていたときに感じた興味はいくらか薄らいでいました。しかし友人の紹介を通じて、宣教師の方から連絡をしてきたのです。

ふたりの若者をアパートに招き入れると、ヨーロッパの



街角で宣教師を見かけたときに感じたあの同じ思いがよみがえってきました。私はじっくりと最初のレッスンに耳を傾けました。彼らが心から伝える証に胸を打たれて、じつと長老たちの目を見つめていると、ずっと以前から彼らを知っていたような思いになりました。宣教師との数週間に及ぶレッスンの後、私は教会に入りました。

ヨーロッパで会った宣教師たちのことをよく考えるのですが、私が後をつけたふたりの宣教師がもしも酒場の前で立ち止まって、冗談にもビールに興味を示したり、若人の好奇心の的となるような種類の店に入っていたとしたら、

彼らが私に与えた模範による感動も色あせていたことでしょう。

私にとってその夏は、宣教師を中心に世界が動いていたといえましょう。彼らは私が見つめていたことも、自分たちの存在そのものが私の証となっていたことも知らないのです。そのうえ、彼らの模範によって私の心が動かされ、福音を受け入れることになったなどは夢にも思っていないでしょう。彼らが街頭で語りかける人々はそれほど多くはなくても、私のように彼らの模範によって影響を受ける人々は大勢いるのではないのでしょうか。□





寒中の ハッスン

グレゴリー・グレン（聞き書き：リサ・A・ジョンソン）



私たちの神権定員会は閉会間近でした。

「発表と割り当てはこれで全部です。」定員会アドバイザーのリード兄弟は、さらに言葉を続けました。「ところで、グレッグとトム、都合がよければ、クラスが終わったあと面接をしたいのだけれど。」

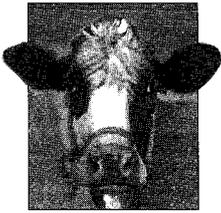
「あーあ、また厄介なことだろうな。」私は心の中でそう考えていました。それから頭を下げて腕を組むと、このまま閉会のお祈りが終わらなければいいのと思っていました。

私たちにはリード兄弟が面接したがっている理由がよくわかっていました。トムと私はここ何週間も神権会に遅刻しているのです。まったく行かないときもありました。そっとドアを開けて中に入り、後ろの列にもぐり込んでみたら、聖餐の割り当てか閉会にやっと間に合ったというようなときもありました。

夜更かしや時間の無駄使いでそうなったわけではありません。それどころか、自宅の酪農場での仕事のために、毎朝4時30分には起きていたほどです。最近父が心臓発作を起こしたため、牛の乳しぼりと小屋の掃除、さらに酪農の仕事全部がトムと私の肩にかかってきたのです。決まった手順で牛の世話をすれば、週日は学校に間に合いました。でも日曜日となると、仕事をやり終えてからシャワーを浴び、服装を整えて7時30分からの神権会に間に合わせるのは至難の業でした。しなければならない仕事を山ほど抱えていても、たとえ少しでも神権会に行った方がよいとは考えていたのです。

しかし神権定員会のアドバイザーは、明らかにそうは思っていないようでした。ほかの人々が全員教室から出て行き、リード兄弟はいすを引いて私たちの近くにやって来ると、驚くほど優しい声で話し

私たち兄弟は何週間も神権会に遅刻していました。まったく行かないときもありました。



始めました。「ねえ、君たちの姿が定員会に見えないと、本当にさみしいよ。私は何か間違ったことをしたかな。レッスンは悪いのかな。何か君たちの気に障るようなことでもしたのだろうか。」

叱られるとばかり思っていたのに、目の前にいるリード兄弟はむしろ、私たちの遅刻の原因が自分にあるのではと考えているのです。私たちは異口同音に、彼にはまったく落ち度がないことを説明しました。そして酪農の仕事のことも話しました。

「私が日曜日の朝早く出かけて行って少し仕事を手伝ったら、何かの助けにはならないかな。そうすれば私にとってもうれしいことだし、君たちも神権会に間に合うと思うんだけど。どうだろうか。仕事は何時に始めているの。」彼はそう尋ねました。

トムと私は同時に同じことを考えていました。リード兄弟にそうさせるわけにはいかないと。その理由は、まず第一に、朝起きてはるばる家からやってくるには、日曜日の朝4時30分という時間はあまりにも早すぎるうえ、彼の家族と共に過ごす時間を奪ってしまうことになるからです。2番目に、氷点下にもなる冬の天候を我慢してもらうには忍びなかったのです。そして3番目には、どれも本当に汚い仕事なので頼みたくないし、実際彼にできるようなことはそれほどなかったからです。

どんなに助けたいと思っても、本気でそんなに早く起きる人がいるわけではない

と考えて、リード兄弟には朝の3時30分ですと答えておきました。それから私たちは彼の誠意あふれる申し出に感謝して握手し、いつかきっと神権会に間に合うように努力することを約束したのです。

次の日曜日はとても寒く、その朝4時15分に目覚めるまでの1週間、私たちはリード兄弟の申し出を深く考えてもみませんでした。窓越しにリード兄弟の古い車が家の外に駐めてあるのを見て、私は仰天しました。急いで着替えて外へ走って行くと、車の窓を叩きました。

彼は車の窓を開けながら、明るく「おはよう」と言いました。彼の吐く息の白さが、寒さを物語っています。握手しようとして伸ばした彼の手が氷のように冷たかったのを覚えています。おそらく3時30分から、私たちを待っていたのでしょう。

「トムが服を着て来るまで、中に入ってください。」私は彼を家の中に招き入れながら言いました。それからトムが準備をしているか確かめに走って行きました。

数分後、リード兄弟とトムと私の3人は、雪の中を納屋まで重い足どりで歩いて行きました。私たちの話が誇張ではなかった証拠に、仕事は山ほどありましたが、リード兄弟は精一杯働いてくれました。

牛の乳しぼりのときに、リード兄弟が少しの間手を休めて遠慮がちに言いました。「あのミルクをほんの少しだけ飲ませてもらってもいいかな。しぼりたてのミルクの味をすっかり忘れてしまっただけね。」

私たちはこの定員会のアドバイザーのことを思うと、胸が熱くなりました。ミルクを一杯飲んでもらい、何リットルかを容器に入れて、おみやげとして家に帰って帰ってもらうことにしました。私たちにできることは、それくらいのことしかありませんでした。

神権会の始まる時間が刻々と近づいて来ているのに、仕事は依然として終わりません。リード兄弟は、家に帰って教会へ行く準備をしなければならない時間になりました。「君たちが時間までにクラスに出席することがいかにむずかしいか、きょうはよくわかったよ。私自身もう少し思慮深い人間になれるよう、努力しようと思うよ。」額の汗をぬぐいながらそう言うと、彼は納屋を出て車の方へ歩いて行きました。

教会に着いた彼が、先に教会に来ていたトムと私を見つけたときの驚きの表情をお見せできなかったのが残念です。私たちの手伝いをしようと、彼が厳しい寒さの朝に一生懸命にやって来たのですから、私たちはもう少し早く仕事を片づけて、彼の負担を軽くすることにしました。正直なところ、その後の私たちがいつも集会に間に合っていたとは言いがたいのですが、少なくともふたりのどちらかは毎週集うようになりました。

リード兄弟は実にすばらしい数々のレッスンをしてくれました。しかし、あの冷たい冬の朝に教えてくれた愛と奉仕のレッスンに匹敵するものはないと思います。□

あの話を 覚えています

トリスタ・クロスリー



「ねえ、トリスタ。私に話してくれたあの日の栄の王国のために、まだ頑張っているの？」こう尋ねたのは私のいとこです。

不意にそう尋ねられた私は、彼女が一体何のことを言っているのかわからず、一瞬口ごもってしまいました。やがて思い出したのです。去年の夏に家族でカリフォルニアを訪れたとき、いとこ私が夜遅くまで語り合っていて、何かの拍子に教会の話になったのです。教会員ではない彼女は教会のことをほとんど知りませんでした。教会の話聞かせてほしいというので、私は喜んで話しました。ジョセフ・スミスの話、私たちの信条、私の夢、私の恐れなど、日の栄の王国に行くという私の目標をも含めて、できる限り話をしました。私の証と、福音が真実であることへの証を伝えました。自分の選んだ伴侶と共に永遠に生きたい、私の家族とも一緒にいたい、私がどれほど心から願っているかを話しました。じっと私の話に耳を傾けていた彼女が話が終わるとまたいろいろなことを尋ねてくるので、私もできる限り答えました。そうして、その晩ふたりは眠りについていたのですが、彼女の方は私の話についてずっと考えていたのです。私の方も彼女に福音を伝えることができ、かなり満足していました。

そうして7カ月が過ぎた今、私の話を覚えていた彼女に私自身が驚いているのです。

「ねえ、そうなんでしょう。」彼女は私の返事を期待して、じっと私を見つめています。私は窓越しに降りしきる雪をじっと見つめていました。ひとひらの雪がたくさんの雪のかたまりにすべて吸い込まれていく様を見ていて、あたかも人生もそんなふうにはかないもののように思えました。

「私がまだ日の栄の王国に行こうと頑張っているかですって。」私は自問してみました。この数カ月の自分を振り返れば、それほど努力をしていないことをよく承知していました。学校の成績は規定以下、親友と呼べる友も今はいないのです。家族関係もあるべき姿とは言いがたく、何よりも重大なことは、私自身が次第に教会に不活発になりつつあることでした。私はその場に腰を下ろすと、自分の人生を見つめ直してむなしさをかみしめていました。振り向いていとこの顔を見つめ、静かな中にもはっきりと、あふれる涙をこらえながら私は言いました。「ええ、頑張っているわ。」

私に目標を思い起こさせてくださった愛深き天父に、心からの感謝を申しあげます。御父の助けがあれば、私は日の栄の王国に行くことができます。疑いの心が起きたら、「はい、頑張っています」という言葉を思い出すことにしています。そして天父が私と共にいてくださることも知っているのです。□



私の父と盲人

デニス・K・アレン

私の記憶にある彼は、50歳ぐらいの、背の高い見るからに強そうな人でした。彼はいつもつなぎの服を着て重そうな作業靴を履き、サングラスをかけていました。私の父と親しかった彼はひとり住まいで、時々我が家に働きに来てくれました。彼は名前をジョンといい、目が不自由になってもう40年以上もたっていました。

彼はゆがんだ壁や曲がった煙突の、一間だけの粗末な家に住んでいました。家の中は散らかっており、じめじめとした腐敗臭や揚げものの臭い、ベーコンの燻製や挽き立てのコーヒー、石炭や煙の臭いが入り交じって漂っていました。ジョンはその家を自分の手で建てたのです。壁や煙突がゆがんでいるのはそのためでした。また食事はほとんどいつもベーコンに卵、フライドポテトにパンと牛乳と決まっています、これがあの臭いの原因になっていました。

ジョンの家は我が家から3キロほど離れており、彼がいつも食料を買いに行く小さな店と同じ距離の所にありましたが、彼はその砂利道をうらやましいほどの速さで堂々と歩いて行くのです。

彼は、町の人々から依頼された、出来栄えにこだわらない大工仕事をして生計を立てていました。ある夏、彼は私の父と一緒に給油所の建築の仕事についたのです。ジョンは我が家まで歩いて来て、一日中父と一緒に仕事をし、積んである板の上に腰をおろしては母の用意した昼食を食べ、夜になると家に帰るといった生活を繰り返していました。そんな彼を父は姿が見えなくなるまでいつも見送っていました。

父は、春と冬の数カ月間、地元の子供たちを学校に送迎するスクールバスの運転手をしていました。そのバスが1日に4度、ジョンの家の前を通るのです。父がクラクションを鳴らすと子供たちは手を振り、それにこたえてジョンがまるで子供たちの顔が見えるかのように手を振り返すのでした。ジョンが寝過ぎて窓に顔を出さないときや、ゆがんだ煙突から煙が出ていないときは、父は決まってバスを止め、窓からこう叫ぶのです。「ジョン、お昼まで寝ていて仕事になるのかい。」ジョンが窓から顔を見せて目覚まし時計のせいだと言いつつ始めると、父はまたバスを走らせるのでした。

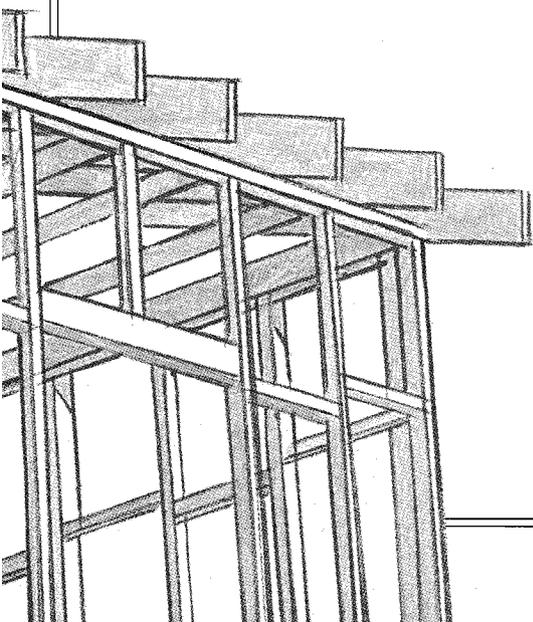
父がジョンと交流を深めていった方法を思うにつけ、私の父に対する認識は深まっていきました。父は、盲人の自立を助ける方法を書物で調べたわけでもなく、大学教授の講義を聞いたわけでもありません。ただ普通に、ジョンに対してひとりの人間としての気づかいを見せただけなのです。父はほとんど毎日、ジョンが元気かどうか自分なりに様子を伺ってはいましたが、一度たりともジョンに向かって「大丈夫か？ 何かできることはないかい？ 必要なものは？ どこか行きたいところはないかね？」などと父が問いかけているのを私は聞いたことがありません。

そのかわりに父はよくこう言っていました。「ジョン、話の準備をしているんだが聞いてみてくれないかな。君の意見を聞きたいんだ。」

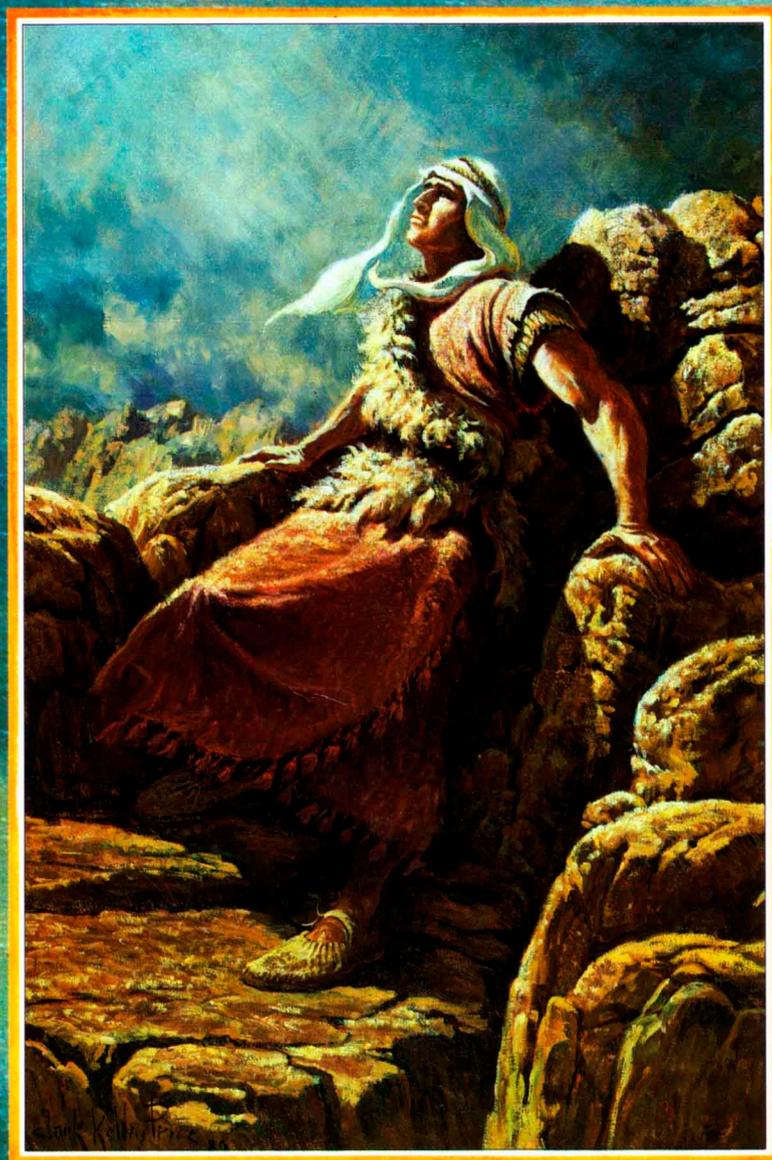
「ビルを建てるつもりなんだが、こんなふうにするのはどうだろう。手を貸してほしいんだ。」

父はいつもジョンに助けを願い、彼から助けを得ていましたが、実はそうすることでジョンに助けを与えていたのです。ジョンと接するたびに父はこう言っていました。「君は立派な人間さ。君の意見はとても参考になるんだ。君にはこの世で生活できる特権が与えられている。人間の尊厳は永遠に貴いものだよ」と。

当時、年輩の人々は自分で身の回りのことができなくなると「養老院」に入っていました。71歳になって病気がちのジョンもそうした施設に入ることになりました。しかしそれは彼にとって新たな門出となったのです。彼はそこで健康を取り戻し、サンシャイン（太陽の輝き）と呼ばれている、ひとりの明るい女性と知り合いました。彼女は足が不自由なために歩くことができませんでした。たくましい腕と足の持ち主のジョンは、彼女の身の回りのことを助け、彼女は彼の目となって助けを与えました。ジョンは自分の生き方を変え、教会に入り神殿結婚をしました。そして世を去るまでの13年間、伴侶とともに幸福な生活を送ったのです。晩年のジョンの生き方を心から喜んだのは私の父をおいてほかにいません。父は私に、救い主がなされたと思われる奉仕を、愛と慈悲と尊敬の念をもって人々になす方法を教えてくれたのです。□



さて私ニーファイは、バウンテフルの土地に何日も日を過したが、主の御声が聞えて私に「起って山へ行け」と仰せになったので私は起って山へ行き主に祈った。（1ニーファイ17：7）



東京神殿神殿長に 新たに ラッセル・N・堀内 兄弟が召される

●ラッセル・N・堀内神殿長ご夫妻



ラッセル・N・堀内兄弟（65歳）は、本年9月1日付でサム・K・島袋前神殿長に代わり、東京神殿神殿長の職に任命された。この任命以前はブリガム・ヤング大学の東洋学部教授であり、夫人のアネット・A・モリ・堀内姉妹もまた、日本語

および、文学、書道を教えていた。

堀内兄弟はブリガム・ヤング大学を卒業し、カリフォルニア大学バークレー校で修士号を、ワシントン大学シアトル校で博士号を取得している。堀内夫妻はこれまで、ユタ州オレムのレイクビューステーク部レ

イクビュー第4ワード部に所属していた。兄弟は今まで、監督、MTC支部長、日本東部伝道部伝道部長などを歴任している。姉妹は、初等協会、日曜学校、扶助協会の各会長などの責任を果たしてきた。

先祖の記録を求めて



東京東ステーク部北千住ワード部 前沢 厚子

色とりどりの美しい花々が街中を鮮やかに飾り始めたころ、気の早い九州の初夏の気配に送り出されるように、私は最後の任地、宮崎をあとにしました。福岡の伝道本部へと向かう汽車の中で、私は涙で景色が見えなくなるほど、感謝と喜びで胸がいっぱいに満たされていました。伝道は本当にすばらしい経験でした。私の証は強められ、主イエス・キリストの贖いの意味をより深く理解することができるようになりました。しかしさらに大きな祝福が、郷里で私を待ちうけていたのです。

伝道中の経験を通して、私は地上と霊界の人々は、互いに助け合わなければ伝道の業は進まないということを大きな証として得ることができました。ですから伝道本部

を去るときに、私は大きな決心をしていました。私の家には、だれが書いたかはわかりませんが、すでに世を去った先祖が書き残した古い系図がありましたが、そこに出ている大部分の人たちは、私の家とは親戚づき合いもなく、現在どこに住んでいるのかさえわかりませんでした。伝道中、私はその人たちをぜひとも探し出さなければならぬと強く感じたのです。

秋田県の実家に帰って間もなく、わずかの情報を手がかりに私の親戚探しの旅は始まりました。私の曾祖父の兄の三男（生きていれば相当の高齢と思われました）を訪ねた方がよいと感じ、やっとのことでその家の電話番号を知ることができたのですが、電話を入れてみると、もうそのおじいさん

は9年も前に亡くなったことを知らされました。それではもう昔の古い話を知っている人もその家族にはいらっしゃらないだろうと、少々がっかりしてしまいました。

ところが数日後、私はひとつの夢を見ました。あるお寺に行こうとして、汽車に乗り遅れそうになって急いでいる夢でした。はっと目を覚ますと朝の6時でした。外は薄暗い雨模様でしたが、私は何かせき立てられるような気持ちを感じて飛び起きました。私にはその夢がおじいさんの家を訪ねるように促しているのだと感じられ、両親に事情を説明する間も惜しんで朝の早い汽車でお寺のある町へと向かいました。そのおじいさんは、幼くして両親と別れ、ひとり寺院に養子として入ったのでした。

3時間後、私はそのお寺の入口に立っていました。新しく、血のつながりのある人々と対面する期待に胸をワクワクさせながら、私は親しみを込めて「ごめんください」とあいさつをしました。「はい」と台所からひょっこり顔を出した、私の母くらいの年の奥さんを見たとき不思議と懐かしい気持

ちを感じたのは、血のつながりのせいだけではありませんでした。それから5分後、私は彼女がその土地で、2番目にバプテスマを受けた古い教会員であることを知ったのです。彼女も系図を調べようとしていました。「まあ、私はあなたを待っていましたよ。」そのときの驚きと喜びといったらくも口では言い表わすことができません。奇しくもその日は亡くなったおじいさんの命日。たまたまその奥さんも嫁ぎ先からその日1日だけ里帰りをしていたのです。その日、私が訪ねなかったならば、決してこのような出会いはなかったでしょう。そしてその家のおばあさんは、その日の明け方にやはりおじいさんの長い夢を見て、そのことを家族に話していたところだったそうです。彼女と私は目と目を見合わせながら、ふたりの出会いが偶然ではないことをはっきりと感じていました。私たちはそこに、

亡くなったおじいさんの霊を強く感じ、次第に目頭が熱くなっていくのでした。必ずおじいさんの身代わりの儀式をすることを私は約束して、その日の夜にそのお寺をあとにしました。

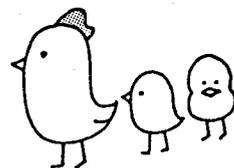
私のこのすばらしい先祖探求の旅はまだ終わりではありませんでした。1週間後、そこからさらに1時間ほど車でいった町に、過去300年の前沢家先祖代々の墓と過去帳のある、もうひとつのお寺を見つけました。なんと、たくさんの苔むした墓石が、ひしめくように1カ所に集められ、半ば無縁仏になりつつあったのです。その住職さんの話から、前沢家の先祖は関ヶ原の戦いの後、水戸から北上してこの地に来たこともわかりました。

折りしも満開の桜に小雨が音もなく降り始め、そのけむった淡い情景の中で、私の心ははるか彼方の古代に連れて行かれまし

た。かつて地上に生きていたたくさんの先祖たちの霊が、今いっせいに私を取り囲んで喜びの声をあげているような、そんな錯覚にとらわれました。

伝道後の短い3週間の中に、私はこのようにしてとても大きな祝福を得ることができました。また先祖探求を通して、両親も私を信頼してくれるようになりました。

私は心から証いたします。先祖の記録を調べて神殿の儀式を行なうことは、生きている者の義務であり特権です。私たちの働きによって、先祖から子孫へのいくつものチェーンが永遠の家族として結ばれていくのです。(まえざわ・あつこ 1961年生まれ、ステーキ部宣教師)



父と、二人三脚で……

日本神戸伝道部専任宣教師 渡辺 英祐

私は今、日本神戸伝道部の専任宣教師として、このすばらしい福音を伝える機会にあずかっています。このように少しでも主のみ業のために働けるようになったのも、かつての私には、本当に夢のような話でした。

私は教会員になる前、ふたつの大きな病気のために普通の人々のような生活ができませんでした。電車にも自転車にも乗れず、走ることはおろか、歩くこともやっとの思いでした。一時は家の外へも出られない状態が続き、学校を休学することまで考えたほどでした。私はそんな自分が嫌になり、この世に生きる希望を何度も見失いそうになりましたが、そのようなとき、いつもかたわらにあった聖書を開いて、神様に心の拠り所を求めていました。そして、1983年のある夏の晩に、私は個別訪問をしてきた姉妹宣教師と出会ってこの教会の福音を知りました。

バプテスマを受けて教会員となり、心から主に頼るようになってから、私の体は、自分はもちろんのこと、周りの人々さえも

驚くほどの回復を見せ、治る見込みのなかったものが2年間で奇跡的に完治したので。神様は、このような小さな者でも慈悲深く救ってくださり、今では以前とは見違えるほどの健康をいただき、主の僕として働けるようになりました。

両親と私と妹の4人家族のうち、健康なのは母と妹だけでした。私の父もまた終戦後に大きな病気にかかり、それが原因で身体障害者となり身体が自由ではありませんでした。子供の頃から、よく階段で父の背中を押してあげたり、駅まで毎日送り迎えをしていました。私はいつもそのような父を見て「大変だなあ」と思いましたが、父はこの大きなハンディキャップを持っているにもかかわらず、それを忘れさせるほどのたくさんの愛を持っていました。私も、父や母、妹の愛に支えられ病気を乗り越えてきたのでした。

私が伝道に出る前、家族の中で教会員は私ひとりだけでしたが、私はこのすばらしい福音を父と分かち合いたいと思い、毎日少しずつ教会の事を語るようになりました。

そして、父と共に教会へ行くようになったのは、私が伝道に出る2カ月前からでした。いよいよ伝道に出る日がやってきたとき、父は私に「元気で行って来い」と声をかけてくれました。お互いに目にいっぱい涙を浮かべながら、強く握手をして、しばしの別れを惜しみました。そのときの父の健康状態を考えて「もしも、この握手が現世で最後のものとなったら……」という思いが一瞬、脳裏を横切りました。私にとって、父を残して伝道に出ることは一番の試練だったのです。しかし、私はそのすべてを神様にゆだねて伝道に出ました。

宣教師となってある日のこと、私が1日の伝道を終えて、アパートに戻ってみると、父からの一通の手紙が速達で届いていました。何か急用かと思い急いで封を開けると、それには、次のようなことが書かれていました。

「お父さんは、近々バプテスマを受けて末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になります。本当は、英祐が伝道を終える2年後にしようかと心秘かに考えていましたが、英祐がJMTCでの訓練を終え、沖縄の首里に召されてから、私も1日も早くこの教会に入るべきだと思ったのです。私はもちろん伝道へは出られませんが、精神的に息子と共に二人三脚で伝道したいと考えたのです。英祐長老には、私の分も合わせて福



音を宣べ伝えてほしいのです。」

この手紙に私は涙を止めることができずして、私は何度も何度もその手紙を読み直し、神様のみ手が確かに父の上であり、父の健康を守ってくださっているという確信を得たのでした。

父のバプテスマ会は、1988年4月17日、日曜日の午後3時30分から、東京の府中ワード部で行なわれました。その間、私は沖繩の首里ワード部の礼拝堂でひざまづき、祈りながら、「今頃は水の中に立っているな、今は按手札だな」と、みたまにより神様を通じてバプテスマ会を見ていました。私は今すぐにもそこへ駆けつけて、父を祝福してあげたい思いでいっぱいでしたが、神様の見守る中、素晴らしい兄弟姉妹たちに囲まれてバプテスマを受けている幸せそうな父の姿を思い浮かべながら、遠い沖繩の地から、バプテスマ会へ思いをはせていました。

その後の父からの手紙によると、バプテ

スマ会には津谷長老、地区代表の浅間長老をはじめ、大勢の兄弟姉妹の方々がご出席くださり、たいへん霊的なすばらしい会であったとのことでした。また、バプテスマを受けてからの父の健康はすこぶる順調で、毎週教会に集い、アロン神権も受け、たくさんの祝福をいただいて、主の僕となって本当によかったと書かれていました。そして、その手紙の末尾には

「伝道の子に導かれ入信す」

と詠まれてありました。

私たちは、とてとても小さな主の僕です。6年前、「もうこの世を去ってしまいたい」と思ったこのひとりの人間に神様は数えきれないほど、たくさんの祝福を与えてくださり、生きる喜びと希望を教えてくださいました。私がかも、あの宣教師と出会うことなく神様を知ることもなかったなら、今の私はこの数々の祝福を受けずに、この世にいなかったかもしれません。私はまだまだこのあふれる主の恵みを受けるほどの

働きをしていません。でも、今宣教師として、この祝福をたくさんの人々と分かち合えることに心から感謝しています。

これからは、父と共に神様の王国へ通じるまっすぐで細い道を、二人三脚で力強く歩んで行きます。そして、私が伝道を終え父と共に神殿で再会できることを心に念じつつ、主のみ業のため全力を尽くして頑張りたいと思います。(わたなべ・えいすけ 1965年生まれ、東京西ステークス部多摩ワード部出身)

あたたかい教会にひかれて

東京西ステークス部多摩ワード部 渡辺 和夫

「聖徒の道」5月号に掲載された「2月に召されたJMTC第105期生14人の名簿」というタイトルのグラビア写真を、私は今つくづくと見えています。実を申し上げますと、この宣教師たちの顔はすでに知っておりました。それには、このような事情がありました。

昭和63年3月1日付で、日本宣教師訓練センターから1通の封書が届きました。それには「御様が立派な宣教師となるための、基本的な勉強を終え、無事任地へと出発され」たこと、今後「2年の間自分の事よりも他の人々の幸福を考え、神様の教えを述べ伝えて、その人々が幸福を見出すお手伝いをする事により、御様は2倍にも3倍にも成長されて、お家に帰られるものと信じております」という内容の、まことに丁寧なお便りとともに2枚の写真が同封されていました。その内の1枚が、津谷先生を中心にした、14名の宣教師たちの集合写真でした。正直なところ今後2年間も息

子と会えないと思うと、寂しさがこみあげ、半ば虚脱状態にあった私にとっては何よりの贈り物で、元気そうな息子の姿に安堵したものです。

昭和63年4月17日に、私は東京・府中ワード部においてバプテスマを受け、晴れて末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となりました。このバプテスマによってキリスト・イエスの死と復活にあずかることができたという厳粛な感動は、生涯忘れることはないでしょう。私はかくして「神の僕」として生まれ変わりました。

いまから約40年前の昭和24年3月に、学校を卒業した私は、その年の秋10月、国立療養所に入院しました。卒業する1年も前に保健所の医師から、このまま放っておいたら間違いなく死ぬであろうと宣告を受けていたのです。当時、死亡率第1位だった肺結核が私の肉体を蝕んでおりました。戦後の食糧難の時代を象徴する病気で、この病気を治すには、当時は外科手術しかありま

せんでした。医師の話では、手術は誰でもできるわけではなく、病巣の位置と体力と、大切なことは時期を逸しないことだということでした。入院1カ月後の11月末、各種精密検査の結果、手術の許可がおり、胸郭成形術を受けることができました。手術室に入ってから、病室へ戻るまで9時間あまり、肋骨7本が切除されました。以後10年ほど闘病生活、ようやく社会人となりました。私の体力は、最も大切な肺活量が健康人の半分に減ってしまったため、階段を上ると息切れし、重いものは持たず、駆け足など絶対不可能と、文字どおり半人前となりました。当時の最先端医学の恩恵を受けることを得た幸運な患者の、これが病を克服した姿でした。

この入院時代を顧みて、奇妙に感じられることは、明日をも知れぬ命をかかえながらも、宗教への関心がまるでなかったことで、むしろ社会改革への心の傾斜が強かったことです。米よこせデモ、メーデー事件、ゼネスト中止命令事件と、世は疾風怒涛時代。サナトリウムにも、それらの波がヒタヒタと打ち寄せる時代でした。社会制度の改革こそ人類に幸福をもたらすと、当時の青年は信じていました。

半人前の私は、今日まで生きることの苦



にいささかの力になってやりたいこと、息子と二人三脚で精神的に伝道したいと望んでいることをお知らせしました。

沖縄で伝道している息子から、毎週、元気な便りが届きます。沖縄の兄弟、姉妹たちの温かい愛に包まれて神様の教えを宣べ伝えているのは嬉しいことです。私も聖典を学び、信仰を強めていきたいと念じております。(わたなべ・かずお 1927年生まれ)

分からなかった」そうだが、四日市の製鉄所で働いていた時、ボイラー係の日本人から「湯」や「ジャガイモ」などをもらい、食糧が少ないにもかかわらず、それを分けてくれたことをたいへん有り難く感じ、その気持ちは今でもはっきり覚えているという。

2回目の来日の今回は「自由の身」であるが「今回も食べもので困っている」とジョーク混じりに話す。スーパー等で食料品を購入する際、日本語の表示が分からないため「塩」と「砂糖」の区別やスパイス類の判断に苦労している。その他では車の通行が日本と米国では反対のため、時々間違ったり。また、狭い道も悩みの種。これ以外、実生活での苦労はなく、日高町のアパート周辺を散歩している時などは、近くの農家の人から花や野菜類がプレゼントされ「日本人はたいへん親切にしてくれています」と話す。

クリステンセン氏にとって捕虜生活を送った日本だが、悪い印象はほとんど持っておらず、戦争についても「それは政治の問題であって、人々のせいではありません」という。そして、2度目の宣教師としての来日は「友情や幸せといった平和のメッセージを持って来ました」とも話す。(紀州新聞 昭和63年2月13日)

所為というのでしょうか、かなり以前から宗教への漠然たる感情から仏教についての書物を読むようになりましたが、納得できる理解に至りませんでした。キリスト教については、無教会派の内村鑑三の伝記を読み、キリスト教の片鱗に接しておりました。ヨハネの第一の手紙4章にこのような言葉があります。「愛する者たちよ。わたしたちは互いに愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生まれた者であって、神を知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛である。」そうだ、教会の人々のあの温かさは、ここから来ているのかも知れない。私も神を知りたい、神の愛を知りたい、と心に期するものがありました。息子が宣教師訓練センターに入所した後、悶々とした心境にあった私は、津谷先生へのお礼状の中に私が入信を決意したこと、息子の伝道

しさを存分に味わねばなりません。日本の社会が高度成長時代に入る10年も前に、半人前の肉体で社会人となった青年を、雇用してくれる会社は皆無でしたし、私自身、世に通用する何の技術・資格も持ち合わせていませんでした。よくぞこれまで生きて来られたと思う度に、陰に陽に私を支えてくださった幾多の人々に深謝せずにはいられません。現在にして思えば、これは「生きておられる神」が、私および家族を生かしてくださったのだと信じています。

ところで、私が息子にとまなわれて教会へ初めて行ったのは、今年に入ってからです。教会の人々の歓迎の握手に、何と温かい雰囲気になった教会であることよと感動したことを覚えています。この心が安まる温かさは、どこから来るものなのだろうか。それを知りたいと思いました。年齢の

新聞から 恩讐を越え布教に専念 の話題

本年2月13日付の紀州新聞において、現在、大阪伝道部で宣教師として働いているアレン・C・クリステンセン、トリス・F・クリステンセンご夫妻が紹介されました。その記事からの抜粋です。

太 太平洋戦争当時に日本軍の捕虜となり、日本国内の製鉄所で働くなど3年半に亘って捕虜生活を体験したアメリカ合衆国・ユタ州出身のアレン・C・クリステンセン氏(67歳)が夫人のトリス・F・クリステンセンさん(65歳)を伴い、昨年末、40数年振りに来日。日高町高家地内のアパートで生活しながら御坊市湯川町丸山にある末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師として活動を続けている。

クリステンセン氏が捕虜になったのは1942年(昭和17年)フィリピン・ミンダナオ島の米空軍事務所勤務していた時、日本軍が進攻して来た。その後、フィリピンの捕虜収容所で2年間生活、1944年6月には捕虜500人と一緒にマニラから船で九州の門司まで送られてくる。門司に着いたのは9月、そこから愛知県・四日市市に送られ、製鉄所で働く。翌年5月には富士市へ移動、



クリステンセン氏夫妻

ここでも製鉄所の仕事で、3カ月後に終戦を迎え、1945年(昭和20年)11月には米国へ帰還している。この間の捕虜生活は3年半に及ぶ。

40数年振りに来日することになったのは昨年5月、末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長エズラ・タフト・ベンソン氏から「日本へ行って布教活動をするように」といった手紙を受けとったため、クリステンセン氏自身「もう一度日本を訪れたい」と考えていたそうで、昨年12月1日に来日した。来年3月29日まで御坊市(住居は日高町のアパート)に滞在して布教活動に従事する。

捕虜だった当時の日本の印象は、移動の際に電車の窓から景色を見た程度で「よく

戦時中捕虜生活体験 アレンC氏夫人同伴再来日
本誌記者が御坊市に訪れた際、5月19日(土)に御坊市にある「福音堂」で、クリステンセン氏夫妻と面談した。クリステンセン氏は、1942年(昭和17年)にフィリピンで捕虜となり、3年半に亘って捕虜生活を体験した。戦後、米国へ帰還し、その後、米国で宣教師として活動している。昨年12月1日に来日した。来年3月29日まで御坊市(住居は日高町のアパート)に滞在して布教活動に従事する。

6月に 召された JMTC 第109期生 10人の名簿

S: ステーキ部, D: 地方部, W: ワード部,
M: 伝道部, B: 支部

左から1~10



〈名 前〉	〈出身地〉
1. デビット・ロバートソン	東京南S / イングリッシュW
2. 小林英樹	神戸S / 姫路W
3. 谷口吉郎	広島S / 五日市W
4. 山根康弘	横浜S / 川崎W
5. 生井通公	東京北S / 川越W

〈伝道地〉
名古屋伝道部
名古屋伝道部
東京北伝道部
仙台伝道部
神戸伝道部

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
6. 野口礼人	東京西S / 多摩W	大阪伝道部
7. 治部啓子	大阪北S / 岡町W	岡山伝道部
8. 直松博美	大阪S / 大阪W	名古屋伝道部
9. 田面実穂	東京東S / 千葉W	仙台伝道部
10. 戸館貴子	札幌西S / 新琴似W	神戸伝道部

7月に 召された JMTC 第110期生 6人の名簿

S: ステーキ部, D: 地方部, W: ワード部,
M: 伝道部, B: 支部

左から1~6



〈名 前〉	〈出身地〉
1. 山口佳子	福岡M / 大分B
2. 管 紀子	福岡M / 長嶺B
3. 森下 静	高松S / 川之江B

〈伝道地〉
札幌伝道部
大阪伝道部
札幌伝道部

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
4. 塚田ルツ	東京西S / 八王子W	神戸伝道部
5. 村松敏孝	静岡S / 浜松W	神戸伝道部
6. 吉田成博	神戸M / 相生B	福岡伝道部

ワード部/支部特集⑥

そびえる雄姿の如く

富士ワード部

静岡ステーキ部



●全国各地のワード部/支部をご紹介するコーナーです。

富士ワード部をご紹介します

監督 土屋 和彦



静岡・山梨の県境にそびえる富士の雄大な姿は、多くの人々の目を楽しませ、心に安らぎを与えてきました。富士の周りの5つの湖、山中湖、本栖湖、河口湖、西湖、精進湖は富士の英姿を映じて、その趣きを一層深いものになっています。四季おりおりの美しさを見せる山の姿や山麓を含む樹海は、富士箱根伊豆国立公園として日本中の人々に知られています。

富士ワード部は、この自然の恵みにあふれた富士山麓に位置し、活発会員80人ほどを中心にいろいろな活動に取り組んでいます。

現在、一昨年11月の教会堂完成を契機に、この地域にステーキ部を組織しよう、というビジョンを立て、懸命に頑張っています。大きな試練もありますが、皆、どのような中にあっても主に頼ること、主を信頼し互いに愛し合うことを忘れてりません。今は教会の中にあっても変化の激しい時代です。これからも様々な困難があるかもしれませんが、主からさらに大きな力が与えられ、それを克服していくことができるように頑張っていきたいと思っています。
(つちや・かずひこ 1941年生まれ)

塗り替えられた人生哲学

松本 哲典



私の父が死んだとき、莫大な借金がありました。お人よしの上にバカがつくと言われていた父は、土地を全部手放したうえ、この世を去ったときには私に大変な試練を残してくれたのです。おかげで残された家族は相続放棄をしたり、かなり辛い目に遇いました。そのとき、人間のお金による汚さ、醜さをいやというほど経験した私は、以来、人間は絶対に信用できないという生活信条を持つことになりました。

1. 人を騙すことはしないが、騙されることは絶対にしない。
2. 人から信じられるようにするが、人を信じることはしない。
3. 人を恨むことはしないが、恨まれてい

る人間に対しては、10倍で恨みかえす……。このような人生哲学が私の中で築かれたのです。人はもちろん、親友でさえ信じられない、まして神など信じない、そして自分の力しか信じない私でした。

すでに改宗していた妻と結婚し、子供ができてからは、真剣に教会について考えるようになり、教会員のやたらに多い握手ぜめと、愛想のよい微笑み、そして宣教師の迫力のある証を聞くたびに、私はいつしかバプテスマを考えるようになっていました。しかし改宗するにあたり、大きな問題がありました。それはお酒でした。私はお酒が好きで、お酒と音楽と語りあえる友があれば満足、お酒をやめるくらいなら死

だほうがいいと思っていました。

でも決断しました。「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない。」この言葉をよく考えた結果、すべてを捨てることにしました。以来2年半、私の信仰は培われてきました。神殿に参入し、家族の結び固めをし、クモラの丘霊園のお墓も用意しました。そして私の確固たる人生哲学は、福音によって、もの見事に塗り替えられたのです。

1. 人を信じ、すべてを赦そう。
2. 人を愛し、すべてを耐えよう。

このように恨みは隣人への愛や赦しに変わり、迫害者のために祈る努力をしている自分に驚いています。お酒ではなく福音に飢えている自分に驚き、仕事好きでない私が教会の責任を喜んでしているのに驚いています。

今や真の幸福とは何かがはっきりわかりました。神の愛も知りました。打算的で偽善的な生き方から、キリストの純粋な愛に

よって生きるように私を変えてくれた末日聖徒イエズ・キリスト教会は真実の教会であると証します。

私を今まで導いてくれた監督さんをはじめ、ホームティーチャーや多くの兄弟姉妹の犠牲や模範、そして愛に感謝しています。そして私に救いの道を与えてくれた妻や子供たちに心から感謝しています。

(まつもと・てつり 1950年生まれ、富士ワード部書記)

富士ワード部の伝道活動



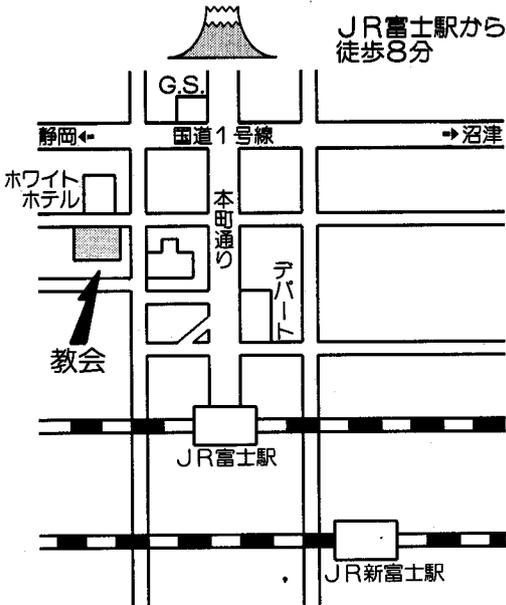
望月 善

富士ワード部の会員一人一人が伝道の大切さを実感するようになったのは、今から3年前のこと、ちょうど、教会堂の建築許可がおりた年です。伝道主任を中心に神権役員会でのミーティング、日曜学校の時間を使い「私たちにできる伝道活動」というテーマを皆で真剣に討論しました。

よく話し合ってみると、私たちにできる伝道活動がたくさんある事が分かりました。例えば、個人的な方法としては、伝道についての祈りや証を繰り返し一生懸命行なうこと、教会の印刷物を大いに利用してできるだけ多くの人々にこの教会を知っていただくこと、自分が末日聖徒であることを日常生活の中で身近な人たちに積極的にアピールすることなどがあげられ、組織的に動く方法としては、伝道チームを編成し、福音を学ぼうとしている方々をバプテスマに導くこと、また一般の人でも興味を持てるようなプログラムを提供し、教会のイメージ作りをすることなどの意見が出されま

した。そして、「一番大切なのは、教会の指導者と家長が、家族全員にいつも伝道に対する個人個人の目標を与えてよく見守り、具体的に励ますことが伝道活動を成功させる原動力である」という結論に至りました。

今では皆、伝道の歩みをさらに早めようという気持ちで、強く抱えています。バプテスマの数は伝道の時間と必ずしも比例しませんが、いつの日かモルモン泉でアルマが多くの人々にバプテスマを施したように富士の地が祝福されるよう願っています。伝道は私たちに与えられた主からの戒めであり、教会の使命です。主が命じたもうことは必ず成し遂げることができると信じています。私はこの末日聖徒イエズ・キリスト教会が唯一真の教会であることを心から証いたします。(もちづき・ぜんいち 1940年生まれ、富士ワード部伝道主任)



見る者の心に
美しくやさしく
力強く話しかける
真っ青な空に
真っ白な雪を
頂く姿を
眺めては
清く美しい心が
喜び踊る
真っ赤な夕焼け空に
美しく映える姿を
眺めては
神様に心静かに
感謝の祈りを
捧げます
信仰生活をおくる
私にとって
富士山は
すばらしい友

篠原のり子
(一九五二年生まれ
広報委員長)

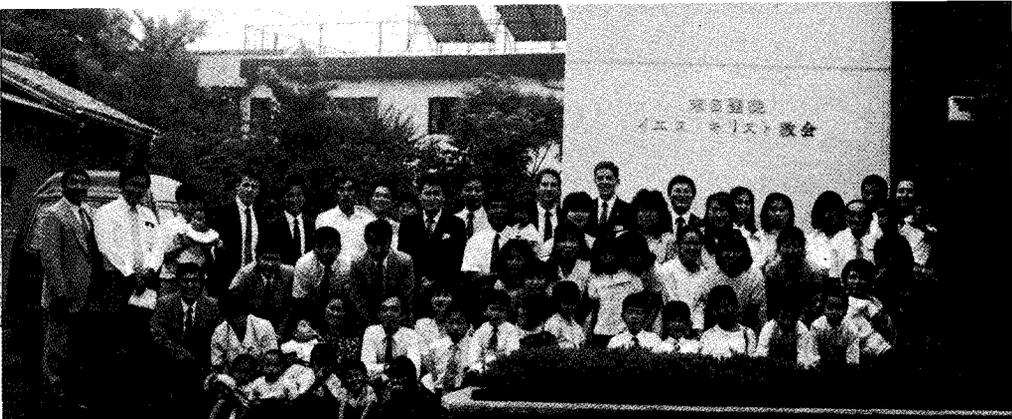
モルモン経を 読もう

川村 修一



ぼくの家族は、毎朝いっしょにモルモン経を読んでいます。なぜかという
と、お父さんが「予言者の教えにしたがって、これから毎日モルモン経を読もう」と
言ったので、ぼくはモルモン経を読む気にな
りました。

はじめはポツリポツリ読んでいました。
今でも少しつかえるけれど、だんだんじ
ょうずに読めるようになってきました。



前、プライマリーで監督のお話があり、
ニーファイ人がレーマン人に伝道をしたお
話をしてくれたとき、ちょうどその朝そこ
を読んでいたのでとてもよくわかって、毎
朝モルモン経を読んでいてよかったと思
い、楽しかったです。

朝起きるのは、いやな時もあるけど、読
んでいると、ときどきすごくいい気持ちに
なります。

モルモン経は、ほかの本よりもいいこと
がわかります。

(かわむら・しゅういち 1977年生まれ)

真理は人を変える

渡辺 幸子



月日がたつのは早いもので、私がバプ
テスマを受けてから4年の歳月がた
ちました。ステーク部宣教師として一生懸
命伝道している夫の姿を見るたびに、「真理
は人を変える」という言葉を思い出し、こ
の教会が真実で、神様が生きておられるこ
とを力強く感じることができます。

私は、夫の猛反対を押し切ってバプテスマ
を受けました。夫は宗教が嫌いで、神様
やイエス・キリストを実在するお方として
信じるのができませんでした。教会のこ
とにふれると機嫌が悪くなり、宣教師や教
会の人とも会うことをいやがり、毎日言い
争いの絶えない日が続きました。楽しかつ
た日曜日も家族の一致がなくなり、寂しそ
うな夫や子供たちの姿を見るたび、胸が締め
つけられる思いでした。

そんな時私は、ホームティーチャーに「繰
り返して祈りなさい」と教えられました。
そしてある日曜日、日曜学校で夫を心から
愛して従うことを学びました。「教会に対
して反対している夫にどうして従うことが
できるだろう」と悩み続け、自分には一体何
ができるのだろうかと考え続けました。結
局、私は夫を心から愛し、従う努力をしよ
うと決めたのです。

それからしばらくの間は、夫の気持ちを
尊重し安息日に教会に集うことを少なくし
て家族と共に過ごすようにしました。ある
日、夫から「なぜ、きょうは教会に行かない
の」と聞かれ、私は「あなたが一番大事
ですから」と答えました。それから少しづ
つ夫の態度が変わって行くのがわかりまし
た。私はその頃から、教会の福音を話すよ
うに努力し、特に永遠の家族について話し
ました。「神殿外で行なわれる結婚は、夫か
妻のどちらかが死ねば終わりを告げるの。
そのような家族は来世で共に暮らすことは
できないの。神殿結婚をして、神のすべて
の戒めに従うならば、家族は永遠に共に暮
らすことができるのよ」と繰り返して話し、
教会の活動に夫と共に参加できるよう毎日
祈り続けました。

そして夫は、ステーク部大会に出席した
り、いろいろな人の話を聞いたり、証を耳
にして、神様の存在をだんだんと受け入れ
るようになっていきました。

私が改宗してから1年後、夫とふたりの
子供たちがバプテスマを受け、みんなで家
族の永遠の結び固めの儀式を受けることが
できました。今は幸福でいっぱいです。

一生懸命努力する時、主の助けがあるこ

とを証できます。宣教師、ホームティーチ
ャー、家庭訪問教師の兄弟姉妹が断食やお
祈りをしてくださったことに感謝していま
す。そして私の愛に心からこたえてくれた
夫や子供たちにも感謝しています。いつも
私たちを見捨てず、愛し励ましてくださ
います神様に心からの感謝を捧げたいと思
います。(わたなべ・さちこ 1946年生まれ、
扶助協会第一副会長)

編集室から

《原稿を募集しています》

▶各地のたよりの原稿を常時募集していま
す。改宗談や日々の生活で得た証、本誌を
読まれての感想文などをお送りください。

▶各地の行事や催しに関する記事はできる
だけ早めにお送りください。

▶ワート部/支部特集への投稿を希望され
る方は、編集室へ直接お電話ください。必
要な資料をお送りいたします。

▶来年1月号掲載分の締切は10月31日(必
着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)
と教会での責任(役職名)、生年月日をご記
入ください。お送りいただいた原稿は一部
手直しさせていただくことがあります。

▶あて先: 〒106東京都港区南麻布5-
10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖
徒の道」編集室 ☎03(444)5264